

いつかを夢見て、私は騎士を目指す

怠惰ご都合

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女には何も無い。

少女は、普通の人が持っているような思い出や幸せを知らない。

両親の顔さえも覚えていない。

どうして生きているのか解らない。

ただ一つだけ、自分が伐刀者ブレイザーだということだけは理解していた。

物心ついた時から持っていた、固有霊装デバイスと能力。

使い方が不明で悩んでいた時、少女は一人の男を見つけた。

何故か知らないが、大勢の横たわっている人を見て、眉一つ動かさない青年。

自分と全く違う存在だが、共通点の一つ見つけた。

そう恐らく彼も伐刀者ブレイザー。

何より、青年が右手に持つナイフが物語っていた。

最初は見ているだけのつもりだったのに、気付けば近寄り声を掛けていた。

目次

あなたの隣に立つために	1
まずはこの状況に慣れてから	12
言い争いと黒歴史	25
いつかの思い出	32
釈明という名の言い訳	44
わからない気持ちを抱いた自分に	50
娘成分の補充はお早めに	64
親子の形（前編）：いつだって君のことを	71
親子の形（後編）：いつまでもアナタの事を	82
過酷な現実が牙を剥く	99
アナタの探してるもの	108
痛い思いと引き換えに	114
せめてもの仕返しに	124

あなたの隣に立つために

「ねえおじさん、私に戦い方教えて」

「は？」

「戦い方!!」

「いやいや、別に聞こえなかった訳じゃないから。あと、せめて『お兄さん』って呼んで？ちよつと傷付く」

「おじさんつてば!!」

青年の事情などお構い無しに、少女はそう続ける。

「ああもう。……ブレイザー伐刀者の俺に教えられる事なんて多くないよ

?人に教えるの下手だし」

「それでも、あなたがいいの!!」

青年はうんざりしながらも答える。

対する少女は笑顔で頷く。

ブレイザー伐刀者。

それは、己の魂を固有デバイス霊装という武装で顕現させ、魔力を用いて異能の力を操る千人に一人の特異存在。

最高クラスなら時間の流れを自由に操ったりでき、科学では検証できなない力を持っている。

自分の能力はそんな大それた代物ではないが、この男ソレは他とは違うと感じた。

「お嬢ちゃんが何を期待してるか知らないが、俺は別に強くもなんともないぞ?」

「でも、私より戦えるは確かでしょ? “強さ”と“戦い”は違うはずよ」

「まあ、な」

「じゃあ決まりね!!」

「……君、人の話を素直に聞かないタイプだろ」

そして少女は、青年に弟子入りしたのだった。

あれから五年、那澄は今年で十五歳となり、日本に七校ある『騎士学校』の一つ、『破軍学園』に入学することになる。

だが、入学式は明日だ。

現時点ではやることなくて暇。

授業も、武の祭典である『七星剣武祭』の代表を決める『選抜戦』もまだ先の話だ。

「どうしようも……おや？」

暇潰し目的で学園を散策していると、第三訓練場に人が集まっついてくのを発見した。

「……ふむ」

聞いた話とところによれば、Fランクの《落第騎士》とAランクの皇女様が戦うのだとか。

「……見てみよ」

無謀の一言に尽きるそんな話が、那澄の好奇心を刺激した。

結果は、《落第騎士》の勝利。

最初は皇女様が圧倒しているように見えたが、実際は違う。

《落第騎士》は敢えて、相手の剣を、業を、太刀筋を受けていた。

方法はよく解らないが、最終的に彼は皇女様のそれらを模倣して勝利した。

ちなみに戦闘の過程で練習場の天井に穴が一つ空いた。

「……どう思いました？」

突然の問いかけに、那澄は声のする方を見る。
声の主は、おそらく自分と同じ年齢の女子。

「別に」

一言、那澄は面倒くさそうに答えた。

「あなたなら、どんな方法で攻略しました？」

「..それは、どっちが相手の場合？」

あまり関わりたくないのに、相手は話を続ける。

「二人とも、ですよ」

「戦うつもり自体ないから、それには答えられないわね」

「えー、本当に？」

「選抜戦の事を言ってるなら、答えてあげる。『その時次第』よ」

「...はあ」

「今度は私が聞く番よ。あなた、何で私に絡んできたの？」

「...」

「人には散々質問しといて、いざ自分が聞かれたら、だんまりかしら
？」

「...」

「そう、ならいいわ。またね。お互いに楽しい学園生活を...」

「...あなたを倒すためよ」

相手が答えなくなったところで、別れを告げようとしたが、遮られ
てしまった。

「ん？」

「戦って、あなたを倒すためよ!!」

「...私には戦う理由なんてないんだけど？」

「あなたになくても、私にはあるのよ!!」

幸い、周囲に見物客の姿はない。

さっきの模擬戦を見終わったことで満足して、皆去っていったの
だ。

唯一いた理事長は、天井の穴を見つめていた。

「その二人、何をしている」

こちらの視線に気付いたのか声をかけてきた。

「いえ、なんでも……」

「……理事長、お願いがあります。私と彼女で模擬戦をさせて下さい」

「お前たちもか。まあいいだろう。今更一組増えたところで何も変わらない。やるならさっさとしろ」

「え、いや、私は別に……」

「ありがとうございます!!」

私の意見は、誰にも聞いてもらえなかった。

「塗り潰せ、不知火」

「覆い尽くせ、朝霞」

お互いに固有^{デバ}霊装^{アイス}を《幻想形態》で展開した。

私は、漆黒の大鎌。

相手は、1対の純白のナイフ。

それぞれ、色も形状も対極と言っていていいだろう。

それでも二人の間には、一つだけ共通しているものがある。

『目の前の相手を倒す』という気持ちだ。

「それでは二人とも、準備はいいな？」

「ええ!!」

「……はあ」

「……始め！」

LET^試 S GO^合 AHEAD^始

試合開始の合図が鳴り響く。

先に仕掛けたのは、相手の女子。

走り寄り、腹部目掛けてナイフを突きつける。

「……はあ」

那澄は気だるげそうに、刃でそれを弾く。

キーン!!、という甲高い音が鳴り響く。

弾かれても相手は構わず、今度は右腕目掛けてナイフを突きつける。

「……」

またか、そう思いながら那澄は再び刃で弾こうとする。

しかし、弾けなかった。

そう、ナイフは右腕に迫っていなかったのだ。

純白のナイフは、那澄の首に切りかかろうとしていた。

「……ッ!?!」

那澄は急いで、対処する。

刃ではなく、柄で防ぐ。

水平に構えていた鎌の、柄を上に移動させる。

これにより、ナイフを自身の頭上に弾く事に成功。

結果、ナイフは空を切る事になった。

「ちよつと、危ないじゃないの」

「……ふん」

那澄の都合などお構い無しに、彼女は追撃してくる。

首や腕に続いて、腿や手首と狙いは様々だが、そのどれもが実戦では致命傷となるかそれに準ずる場所である。

つまり、自分の前に立っているこの女子生徒は、那澄を仕留めに来ていると言える。

そう、実戦ならば。

「随分とまあ、面倒な攻め方をするのね。あなた」

「あなた程じゃないと思うけどね」

「あらあら、バレてたの。思ったより鋭いのね、あなた」

そう、攻防の最中に那澄は、相手の武器を弾く攻め方をしていた。それは、戦闘中では形勢逆転となる行為。

武器を失えば、素手や投擲で戦う他にない。

故に、攻撃するための手段が減るのである。

「それにしても、あなた……」

「紗奈。空戸紗奈よ」

「……驚いたわ。だって、あなたも『空戸』なんですよ。おまけに攻め方も似てるなんて」

「……. そんなにおかしいかしら?」

「ええ。だって私以外にそんな……」

「『そんな条件の揃う人、あの人しか知らないから』……かしら?」

その言葉を聞いて、那澄は得物を構え直す。

目の前の人間が、何を言いたいのか、解ってしまったから。

「答えは簡単よ。私もあの人に、空戸春澄兄さんに教わったから」

「……. そう」

「じゃあお喋りは終わりよ。虚像具象!!」

紗奈が叫ぶと同時に、那澄の周囲に数え切れない程のナイフが展開される。

「……. つ!」

近くに展開されたナイフを攻撃するが、すり抜けてしまった。

「諦めなさい。これだけの数から本物を見つけるなんて不可能。見つけるより先にあなたの方が終わるわよ」

確かにこのままでは負けてしまう。

一本一本狙っていても罅が明かないのは明確だから。

だが、別に一本ずつ攻撃する必要はない。

……. だって、全て消せばいいだけの話なのだから。

「ぬるいわよ、歪ディスターファントな幻想」

那澄は呟くと、周囲のナイフは一斉に消えた。

「……. なっ!」

ナイフを構え直した紗奈と、対峙する那澄。

殺伐とした空気の中、先に動いたのは審判をやっていた神宮寺黒乃だった。

「あー、せつかくのところですまないが、そろそろ終わってもらおうぞ
お前達」

「……………えっ?」

「……………は?」

「私としても引き受けたからには最後まで見届けたいところではあるが、生憎と外せない要件が入った」

「は、はあ」

気の抜けた返事をしたのは紗奈。

「ちようどいい。ほい」

投げ渡されたのは、鍵。

一人に一個ずつ。

「あの、これは?」

「番号が同じ気がするんですけど」

呆気にとられてる二人に神宮寺は告げる。

「お前達の部屋の鍵だ。これから二年間、ルームメイトとして仲良くしろよ」

「……………ええ」

「……………うっわあ」

お互いに、相手の顔と貰った鍵を何度も見て、盛大な溜め息をついた。

こうして模擬戦は意外な結末に終わった。

「……ねえ」

隣から紗奈の不満そうな声が聞こえてくる。

「何よ」

「あなた、兄さんとどんな関係なのよ」

「私が答えたとして、それがあなたに関係あるのかしら？」
ガチャリという音と共にドアが開く。

「大有りよ!! だって私は……」

「外で大声は迷惑になるから、中で話せば?」

「……くっ」

那澄は構わずに進む。

対する紗奈は、不服そうにしながらも後に続く。

「さあ、もういいわよ」

「……だって私はあの人の実の妹だから」

答えは予想していた通りだった。

「さ、ほら言ったでしょ。今度はあなたが話さないよ」

「……一方的ねえ」

さて、どう伝えたものか。

正直に話しても、それはそれで面白みにかけるからつまらない。
かといって、嘘を伝えてもそれも面白くない。

そんな風に少し考えていると、一つ思いついた。

「あなた、〃妹〃って言ったわよねえ」

「……ええ」

「〃血の繋がった妹〃と」

「だ、だから何よ」

ニヤリと笑って、那澄は伝える。

「じゃあ……私の叔母さんにあたるのねえ」

「なっ、何をいきなり!？」

「だって私、春澄さんの娘ですからあ」

「はあ!？」

「義理よ義理。養子だから血は繋がってないわよ」
まあ、これなら嘘をついた事にはならないだろう。
詳細は気が向いた時にでも聞かせればいい。

「……確かに兄さんならあり得なくはないけど」
「けど？何かしら、叔・母・さ・ん？」

「同年に叔母さん呼ばわりされるのは嫌なの!!」
「じゃあ、なんて呼べばいいのよ」

「お姉様」
「嫌よ」

「……姉上」
「堅苦しいから却下」

「え、もう終わり!?ボキャブラリー無いにも程があると思うわよ」
「……くう」

「仕方ないわねえ。……お姉ちゃん」で良しとしてあげる」
「ええ、それはちよつと」

「単なる呼び方に何を求めているのよ」
悩んでる紗奈を放って、那澄は部屋を物色する。

「……あ」
見つけたのは二段ベッド。

これまた、軽い争いになるやつ。
「……私が上だからね」

後ろから声が聞こえる。
いや、正直どちらでもいいのだが、一方的に決めつけられると反対したくなるのが人間の心理。

「あらあら、恐くないのかしら？」
「高所恐怖症の事を言ってるならお構い無く。生憎と平気よ」

「いえいえ。私が言いたいのは、叔母さんが落ちて怪我しないか」
「よ。ほらあ、高齢の人って、若い人と比べて骨が脆いって言うからあ」

「誰が高齢よ！私、あなたと同年だからね！」

「そういう事は私に勝ってから言えば？何がとは言わないけど」
那澄はそういつて、これみよがしに自分の身体を強調する。

「……くう。でもその分、足りないんじゃないの？ここが」
対する紗奈は自身の頭を指差して言い返す。

言い争いをしていて、どっちが上か決まるはずもない。

悟った二人は、最初に言ったように『紗奈が上』ということで納得した。

そんなこんなで一日は終わった。

そして次の日の朝。

「おはよう那澄」

「おはようございます、叔・母・さ・ん」

二人の一日は悪口から始まる。

「……まだ言うのね」

「当然でしょ。これからよろしくね」

「……あんな、嫌な奴ね」

「あらあら、初めて気が合ったわねえ」

それでもまあ、悪口を言い合える間柄の方が、ただ無視し合うよりは良いだろう。

何より、理事長直々に決められた以上は、三年間は同室なのだ。
二人の関係が変わるのはそう遠くないだろう。

「ちよつと、早くしなさいよ!!私の準備ができないじゃない!!」

「えー、移動しながらやればいいんじゃない?」

「馬鹿なことやってんじゃないわよ!!いいから早く!!」

「……せつかちねえ」

そう遠くない……はずだ、多分。

空戸 那澄 (NASUMI SORATO)

所属：破軍学園一年三組

伐刀者ランク：B

ノウブルアーツ
伐刀絶技：歪な幻想ディスターフアクト

二つ名：NO DATE

人物概要：好奇心溢れる面倒くさがり

攻撃力：D+

防御力：C

魔力量：A

魔力制御：B+

身体能力：C

運：E

いつも眠そうにしながら、過ごしている。

行動方針は基本的に「好奇心の向くまま」

黒髪のロングヘアをいつもポニーテールにしている。

尚、髪に関しては伸ばしているのではなく、面倒だけで仕方なくである。

家事は……できない。

まずはこの状況に慣れてから

あの人の妹・・・ね。

思い出すのは、五年前の出来事。

そう、あの人と初めて出会った日の事。

「俺は春澄（はると）。空戸春澄だ。君の名前は？」

「そんなの・・・知らない。どうしても名前呼びたいならあなたの好きなようにようにしていいわよ」

その問いに、少女は首を横に振る。

「・・・なんだ名前ないのか」

「うん」

「とはいえなあ、呼び名がないのは不便だしなあ」

「・・・」

「・・・うーん、那澄とか？」

「はあ」

「あれ、気に入らなかった？『美しい程に澄んでる』って意味なんだけど」

「・・・単なる呼び方に何を求めて、そんな大層な意味込めてるのよ」

「戸籍とかは面倒だから、俺の養子でいいか。必然的に名字も一緒になるしな」

「・・・いい加減ねえ」

「つたく、素直じゃないのな」

「・・・はいはい」

口頭では冷たくしつつも、少女の、那澄の表情は喜んでいた。

恐らくはバレていたのだろう。

彼は、たった今父となった青年は呆れながらも、笑って那澄の頭を撫でていた。

「・・・手、大きいのね」

「何だ、迷惑だったか？悪いな、つい癖でやっちゃって」

「別に、あなたがやりたいなら満足するまでやっても構わないわ」

「そうかそうか嬉しいか」

「……ふん」

「頭が少し強めに左右に揺さぶられる。

髪がくしゃくしゃになる程、乱暴なはずなのに何処か心地いい。

「なんだか、アイツ……妹みたいだなあ」

「妹？」

「ああ、年は十一も離れてるから、今は十歳か」

「なんだ、私と一緒にじゃない」

「へえ、そうなのか。……って事は俺は妹におじさん呼ばわりされたも同然なのか!？」

青年は突然、驚いて落ち込んだ。

「いやいや、二十一で十歳の養子を取るのもなかなかないと思うけど」

「……じゃあ、兄として接した方がいいか？」

「それは、同一視されてるみたいでなんか嫌」

「じゃあ娘でオツケー……だな」

さつきまで落ち込んだと思ったら、今度は再び笑い出した。

当時の那澄には「変な人」位の認識しか出来なかった。

「……いつまでぼけーつとしてのよ」

五年前の思い出していると、そんな声が聞こえてきた。

「んえ？」

声のする方を向くと、叔母さ……紗奈お姉様がジトーつと私の顔を見つめていた。

「その様子だと、先生の話も聞いてないんでしょうね」

「まあ、その点は？お優しいお姉様が？教えてくれるでしょうから？」

「……本っ当にいい性格してるわね」

「あらホントにやってくれるの。流石お姉ちゃん、愛してるー。……お休みー」

そして那澄は睡眠をとるという行動に出た。

横で何か言っている紗奈を無視して、目を閉じる。

次に目を覚ました時には、ホームルームは終わっている事だろう。

「……って訳で、『能力値選抜制度』は廃止になって、新たに『全校生徒参加の実戦選抜制度』に変わったらしいわ。あと、参加は自由なんだって」

廊下を歩きながら、那澄は先程の説明を、紗奈からされていた。

「自由ねえ。なら別に……」

「……まさか『別に出なくてもいいわよね』とか言い出さないわよね」

「……ん、んう」

「そこんどこ、後できつちり話し合いましたようねえ」

「……自由参加ならいいじゃない」

「ふうくん」

「あつ、ねえねえほらあそこ!!昨日、模擬戦してた人じゃないかしら!？」

「……今誤魔化しても後々追い詰めるだけなんだから、結果は変わらないわよ?」

凶星をつかれて、急いで話題を変える事にした那澄。

だが、それでも切り抜けられる相手ではなかった。
突然、周囲がざわついた。

正確には、周りの生徒が、絶叫していた。

「……うっわあ」

「つたく、今度は何よ。うるさいわ……ね!？」

視線の先では、彼の『Fランク騎士』が短い銀髪と淡い翡翠色の瞳を備えた小柄な少女と、キスしていた。

「ち、ちよつとイツキ!あ、あああ、アンタなにやってんのよツ!？」

Aランクの皇女様が叫んだ『イツキ』というのは、たった今キスしていた彼の事だろう。

「ぼ、ぼぼ僕だつてわからないよツ!？」

彼は慌てて少女の腕を首から引き離して叫んだ。

客観的に見ている分には「面白い」で済むが、当人たちからすれば堪ったものではないだろう。

しかも、

「同じ血と肉を分かつ、鉄よりも固い絆で結ばれた兄妹が口づけするのはごくごく自然ですよ。いえ、それでも足りない位です。ホントに感動の再開なら、それ以上の事をして良い。ですよね、お兄様」

「そんなわけないからね、珠雫!？」

とかなんとか、付け加えている。

「お兄様」という単語から、彼女は『イツキ』の妹なのだろう。

そして、キスの時点で既に紅潮していた紗奈は、彼女の言葉を聞いて見事に茹だつていた。

この手の事に対しては初心なのだろう。

この反応が面白かった那澄は、彼女の耳元に近づいて

「兄妹なら当然だつて。なら私たちもしてみようかしらね、お・ね・

え・さ・ま」

からかう事にした。

「ほらお姉様、早……くうツ!？」

ゴンツ、という鈍い音と共に、那澄の後頭部に激痛が走った。

「……そろそろ静かにしなさいよ?？」

「うう、いった〜い」

あまりの痛みから那澄は蹲った。

激痛の正体は、紗奈の口封じ（物理）だった。

紗奈の手が動いてから那澄が後頭部を押さえるまで、3秒にも満たなかっただろう。

「・・・ったく、もう」

「ねえ、ちよつと〜。引つ張らないでっつてば〜」

未だ顔を赤くしながら、那澄の制服の襟首を掴んで歩く紗奈と、頭を押さえたまま引きずられていく那澄。

彼女ら二人の光景を見て、周囲の生徒たちが呆然としたのは、言うまでもないだろう。

「・・・ねえ、それ何よ」

後ろから覗き込んだ紗奈は、思わずそんな声を出してしまった。

視線の先は、皿に盛られた得体の知れないナニカ。

色は緑でコポコポと泡立っている。

「何って・・・なんだっけ？確かシチューだったような」

製作担当は・・・那澄。

使った鍋は原型を留めておらず、皿からは涙を誘う刺激臭が漂っている。

「・・・嗚呼、神よ」

「何よ何よ、普通に美味しいじゃない。変に構えないでよ、ただのシチューに」

因みに紗奈の目の前では、涼しい顔で食べていた。

「食べなければ」そう思いつつもの、紗奈の持つスプーンは動かない。

「・・・いやあ」

「ったく、しょうがないわねえ」

突然、那澄がそんな事を言い出した。

「…………ごめん」

口では謝罪しつつも、紗奈の表情は明るい。

助かったという気持ちが全身から溢れている。

「安心なさい、食べさせてあげるわ」

この一言を聞くまでは。

「…………Oh, really?」

「あらあら、思わず英語が出てくる位嬉しいのね。答えは勿論、YE

S」

「…………ちよ、ちよつと」

「さあほら、アーン」

「…………う、うう」

「怖がらないで、ほ・ら」

「うむう…………あれ、美味し…………い？」

驚いたことに、不味くなかった。

さつきまで拒否していたのが、勿体ないと思う位には。

「でしよう？」

紗奈の手は動いた。

ソレを、凡そシチューとは思えない代物を身体は欲していた。

しかし、何事にも代償は存在するという事を忘れてはならない。

そう、紗奈の身体には…………少しずつ変調が訪れていた。

おかしい、さつきから汗が止まらない。

今の季節は春で、今日の気温もそれほど高くないのは確認済み。

にもかかわらず、拭いても拭いても、汗が溢れ出てくる。

この皿の臭いからは、別に変な物は感じ取れなかった。

味は、特に異常もな…………く？

その瞬間、紗奈の視界が段々とボヤけていく。

「ちよ……と、お……様」

自分を呼ぶ、那澄の声が遠くなっていく。

そんな状況で、思考がまともにも働くはずもない。

限界は目に見えていた。

結論、紗奈の意識は……落ちた。

「なくんだ、気絶する程気に入ってくれたのね。良かったわあ」

那澄は倒れた義姉を心配する事もなく、食事を続けた。

「……うう」

うなされる声が、食事に夢中な那澄の耳に届くことはない。

気がつけば、もう朝だった。

あのまま机に突っ伏していたから身体が固くなっている。

目覚めにシャワーを浴びて、一人ベッドに寝ている同居人を起こす。

「……んう?」

「早速だけど、出かけるわよ」

「はいはい、いってら〜」

「何言ってるんの、あなたも行くのよ」

「はいはい……後でね」

もそもそと動きながら、そんな答えが帰ってきた。

そんな態度に、少しイラっとしながらも再び呼びかける。

「あなたもって言ってるでしょー!」

「……じゃあ、おぶってー」

その言葉に、あまりの衝撃に……言葉が出なかった。

「……は?」

「できないんだー?」

「いやいや。できないとかそういう問題じゃないから」

「ふーん、そう」

「……あのねえ」

「……」

「ちよつとー!」

「……」

もはや返事すらしないその態度に、紗奈の思考は停止した。

「いいわ、やってあげる」

「……え?」

「だから、やってあげるって言ってるの!その代わり、早く支度済ませてよね」

「ちよつ、マジでやんの!?!」

那澄は思い切り起き上がる。

了承されるとは思っていなかったのだろう。

その顔には、いつもの気だるげな表情ではなく、困惑が浮かんでいた。

「……なんで、ホントにやるのよ」

「アンタがやれって言っただけでしょ」

「そうんだけどさあ」

会話から解るように、那澄は「おんぶ」されていた。

幸い、周囲に人はいないから、この状況を見られて戸惑う事もない。

「……こつち見ないでよ」

今にも消えそうな声が聞こえてきた。

こつそり見ると、那澄の顔は真っ赤になっていた。

「アンタでも照れるのね」

「……見ないでって言ったじゃない」

「あと、少し重……」

「うっさい、重くない。つか言わせない」

行き先は、学園の近くにある大型のショッピングモール。

目的は日用品の買い出しだ。

そのまま、歩いていると到着した。

すぐに済ませてしまうのもあまり面白くないので、少し散策するこ
とに。

しかし、完全に無人というのはそうそうない。

ましてや、ショッピングモールともなれば尚更である。

ある程度、店の把握を終えたそんな時だった。

昨日の、兄妹と皇女様と爽やかそうな男と、偶々顔を向けた那澄の
目が合ってしまった。

ガラス一枚隔てているから、声が聞こえる事はないが、視線は消え
ない。

「……降ろして」

那澄は恥ずかしさから、その一言しか伝えられなかった。

「え、もういいの？でもまだ……」

「首をゆっくり左に向けて。それで理解できるはずよ」

説明するよりも、状況を理解してもらおう方が早い。

そう思つての事だろう。

「全く、なんなの……よ」

「OK? 解つたらすぐ降ろして……って何してんの!？」

那澄が思わず叫んだのには、理由があつた。

状況を把握したはずの紗奈が、四人に対して手を振っているのだ。

四人の中で手を振り返したのは、爽やかそうな男だけ。

あとの三人は呆然としていた。

「……」

「あれ、もういいの?」

「……帰るわ。必要なのは勝手に買つていて」

見られた恥ずかしさから、那澄は自分から降りた。

そして、寮に向かつて歩こうとした時。
身体が動かなかった、いや動けなかった。
当然、犯人は紗奈。

いつの間に振り返ったのか、右手で肩を掴まれていた。

「……離してよ」

「まあまあ」

「何よ」

「あの四人に混ざりましょうよ」

「……はあ!？」

「上手く説明すれば、他に話されずに済むと思わない?」

「……」

その提案に一瞬でも考えたのが失敗だった。

「んじゃ、決定」

「あ、ちよつと引つ張らないでよ!」

那澄は腕を掴まれて、四人の下へと連行されてしまった。

困惑顔の那澄とは反対に笑顔の紗奈。

その表情に、遠慮とか那澄への配慮などは、微塵も感じられなかった。

「あら、いらっしやい。今度は歩いて来たのね」

二人を歓迎したのは、例の青年だった。

そして俗に「イケメン」と呼ばれる顔をした青年の口調は、意外にもオネエだった。

「……え、ええ」

「何言ってるのか知らないけど、私は最初から歩いてたわよ」

その対応に戸惑う紗奈と、気にしない那澄。

「え、でもさつきまで……」

「見てないわよね、見なかったわよね、見てないって言いなさい」

『イツキ』が何か言いかけたが、那澄は彼の言葉を遮って有無を言わさぬ雰囲気を出した。

「アツハイ」

「うんうん、素直なのは良い事よ」

「ち、ちよつとイツキ!!」

「……あ、頭痛い」

『イツキ』に問い詰める皇女様と、その様子を見て溜め息をつく紗奈。

そんな中で、

「それで、ついさつきまで往来で“あんな事を”していたお二人は何処の誰なんですか？自己紹介もしないなんて、失礼だとは思わないんですか？」

『イツキ』の妹だけは、那澄の圧力に屈しなかった。

いや、気にしてすらいなかった。

「私は、空戸紗奈です。えと、よろしくです」

「……空戸那澄」

紗奈の自己紹介に、那澄は渋々続くことに。

結論として二人は、目の前の四人の名前を知れた。

『イツキ』と呼ばれていた彼は黒鉄一輝。

ただ妹とキスする変態ではなく、意外にもしつかりした魔導騎士

だった。

彼に問題があるのではなく、単に不幸なだけのようだ。

皇女様の名前は、ステラ・ヴァーミリオン。

世界でも数少ないAランク騎士で、ヴァーミリオン皇国の第2皇女様だとか。

少しおてんばっぽい。

あと、黒鉄さんと同部屋だとか。

そして、イケメンのオネエ。

彼（彼女？）は有栖院風。

倫理や常識については、四人の中で一輝と同じ位、しっかりしてそうないメージ。

最後に、黒鉄さんの妹は黒鉄珠雫。

ゴスロリ服に包まれた彼女は、意外にもBランク。

一輝の事になると誰にも止められない程に、まあ良く喋る。

有栖院のルームメイトだとか。

ただ、正直なところ那澄は彼女の事が、好きになれない。

「面倒ねえ」

「……ねえ、誰に解説してんの？」

聞いた事をまとめていたら、紗奈が質問してきた。

だが、那澄はそんな彼女を無視する。

所属：破軍学園一年三組

伐刀者ランク：C

伐刀絶技：虚像具象ノウフルアーツ

二つ名：NO DATE

人物概要：常に損する苦勞人

攻撃力：A |

防御力：E

魔力量：C +

魔力制御：D |

身体能力：B

運：C

那澄とは対極な性格をしている。

常に那澄に振り回される苦勞人。

髪は淡い茶色でセミロング。

那澄と違い、家事はできる。

戸籍上、同年の那澄とは叔母と姪の関係。

性格や考えが違う為、いつも何かしら衝突している。

言い争いと黒歴史

「ねえねえお姉ちゃん」

「……いきなり何よ気持ち悪いわね」

猫などで声で話しかける那澄と、嫌そうに答える紗奈。

「能力で私もう一人作って？」

「理由は？当然、あるんでしょ？誰もが納得する理由が」

「……ありますう」

「その間は何よ。後、語尾をそれっぽく言っても私が納得しなきゃダメよ」

「……あるもん!!」

「『もん!!』じゃないわよ。ほら、さつさと話して楽になりなさいな」

「……楽なんだもん」

「……は？」

「だって、その方が楽できるんだもんっ!!」

紗奈は、あまりの衝撃に言葉が出なかった。

理由があまりにも自分本位だったというのもあるが、頬を少し膨らませているその態度が子どもっぽく見えたからだ。

「……お断り」

「なんでー、理由なら話したじゃない!？」

「私が納得できないからよ。そもそも、思いつきり自分本位な動機に誰が納得できると思ったのよ？」

「……うぐう」

「それに、仮に私が許可したとしても理事長が絶対に許さないと思
うわよ？」

「……？」

何度も反論してくる那澄に、効果絶大なソレを告げた。

「第一、伐刀絶技ノウブアルアーツを使うって事は……固有霊装デバイスの不正使用するつて事じゃない」

「……あ」

ずうううん、と効果音が出そうな程に落ち込んでいるのが解る。

ないで続けて・・・ふふ」

那澄はこっそりと手に持っている本を隠した。

「・・・今、何か隠したでしょ」

しかし、同居人の事を把握できつつある紗奈は一瞬の事も見過ごさなかつた。

「な、何も隠してなんて」

「私があなたと同居してから、どれくらい経ってると思ってるのよ」

「・・・一週間」

「そうね、一週間。その間に、あなたの性格を知る位なんて事ないわ」

「いやいや、僅か一週間でバレる程安い性格してない って・・・」

「なら、何を隠してるのかしら？」

「・・・別に何も隠してなんかないし？」

「へえそうなの、ふうくん？」

そう言うのと紗奈は急に黙ってしまった。

「え、ちよつと？」

「ふうくん？」

「・・・ひよつとして怒ってる？」

「・・・別に、起こってなんてませんけど？」

口では否定しつつも雰囲気は変わっていない

「えーつと、ゴメンね？」

「聞こえな〜い、心がこもってないから受け付けませ〜ん」

「ッしつかり聞こえてるじゃん」という言葉が出かけるが、かろうじて飲み込むことに成功する。

(私は悪くないが、)今の状況を端から見れば、多数の人がこの同居人を支持するであろう。

なら、(不満ではあるが)このまま謝り穩便に済ませるのが最善策だ。

「許してっば〜」

「何を隠してるのか、教えてくれたら許してあげる」

「・・・っ!？」

うっかり差し出そうとしたソレを慌てて引き止める。

「はい隙ありー」

その一瞬の間に、後ろに回り込まれてソレを奪われてしまった。

この攻防戦の目的であるソレは、電子化が一般的である今の時代にはもはや絶滅危惧レベルだと言える書籍（漫画）なのだ。

ではなにが問題なのか。

パツと見、特に問題は内容に思えるだろう。

しかし違った。

散々振り回しておきながら、〴〵その正体、実は漫画でした（テヘツ）

〴〵

これ自体が最早アウトである。

いくら慰めるためとはいえ、『しようがない』の一言で済ませてくれる程、この同居人は優しくはない。では何故、自ら困りにいくのか？

〴〵どうせ怒られるなら、多少なりは迷惑かけてやる。だって自分だけが困るなんて癪だから〴〵

それが那澄私の言い分だから。

「……とかそんなのを是とするのはOKだったりしない？」

「……そんな迷惑極まりない意見には誰一人として賛同しないし、仮に提唱したとしても全力で阻止してあげるから安心しなさい」

「……えー」

「あと長い。うるさい。設定がいちいち面倒くさい。うるさい」

「……はいはい。うるさいし、そもそも最初から叔母さんには聞いてませ〜ん」

「自分から言い出したくせに随分な言い草ね!?あとまた〴〵叔母さん

“ って言ったわね?! いい加減その口無理やり閉ざすわよ!”

「閉ざすならご自身の口でどうぞー」

「・・・あなた達、さつきまで仲良くなかったかしら?」

ステラがそう呟くも、口論中の二人はお構いなしだ。

「覚えてませくん。いつの事ですかあ?」

一輝たちが映画について話している中、2人は全く違う事で騒いでいた。

因みに アンリミテッドブレイドワークス ゲートオブバビロン 無限の剣製よりも王の財宝の方が紗奈の能力的に

合つてるとかは、実は私が一番理解してるから突っ込まないで欲しいな” というのは言うまでもなく那澄の心の代弁である。

「アンタねえ・・・」

「で、決まったのかしら?」

紗奈が何か言いかけた途端、嫌な予感がした那澄は話を強引に変えた。

変えた先は当然、映画についてだ。

「ああ、そうだね。無難にこれにしようと思うんだけど・・・」

そう言つて、一輝が映画のサイトを見せてきた。

見せられたのは、『ガンジー 怒りの解脱』

タイトルの下では、炎をバックにした坊主頭上半身裸のムキムキマッチョメンが、重火器を手に佇んでいる。

気になる煽り文句は『許すことは強さの証と言つたな。あれは嘘だ』

「・・・ちよつと那澄、これが無難って言えるの?」

「・・・というかそもそも、これが一番無難つて他のは一体どんなレベルなのよ」

二人だけで話していると一輝は苦笑いしていた。

どうやら、彼も同意見のようである。

「じゃ、映画も決まったみたいだから私たちは帰るわね」

那澄がそう言い出すと、紗奈はキョトンとした。

「一緒しないの?」

「いやまあ、確かに気になる内容ではあるけどね・・・」

「けど、何よ？」

「私、一度外に出ると最低でも4時間は寝ないと動く気しないの」

「ただ、怠けたいだけでしょソレ!？」

「それに、元々は口止めに来ただけだし」

そう、那澄がこの4人と合流したのは黒歴史を口封じおんぶ姿するためである。

ソレが終わった今、もうここにいる理由はないのである。

「じゃ、またねー」

別れの挨拶を済ませて、那澄はさっさと歩き出した。

「ちよ、ちよつと!?!えつと、突然お邪魔してごめんなさい」

「そんなに謝らなくても別にいいわよ、またお話ししましょ?」

「……ありがとう」

置いていかれた紗奈は有栖院にそう告げて急いで同居人の後を追った。

「ちよつ……ま、待ちなさいって!」

「……どうかしたの?」

呼びかけるままに振り向くと紗奈が息を切らしながら立っていた。

「……あのまま一緒させてもらっても良かったんじゃないの?」

「はあ……お断りよ、面倒くさい」

「ひ、開き直るのね。てつきりふざけるとばかり」

「ふざけてなんてませんー」

「へえ、そうなの。ふうーん?」

いつかの思い出

「って感じでそのまま何事も無く帰れるはずだったのに。だからあの時言ったのにく、人の言うことをちゃんと聞いとけば良かったんですう」

「そういう事は、もっと真面目な雰囲気の中で伝えるモンでしょう！」

「おいそこの二人、さつきからごちやごちやうるせえぞ！」

近くにいた男がアサルトライフルを構えて怒鳴りだす。

「……………っ!？」

「痛い思いしたくなかったら、黙ってるー！」

「……………は、はい」

ライフルを構えた集団で囲んでおきながら、騒ぐなど。なんとも無理な話である。

遡ること、1、2時間前。

買い物を終えた二人が帰ろうとした矢先の事だった。

突然、バタバタという足音が、近づいてきた。

音のする方へ顔を向けると銃を持った男たちが向かってきていた。

「な、なんなの？なんかのサプライズ？」

「……………」

走り寄ってくる男たちを見て、動揺する紗奈と静かになる那澄。

「ねえ、知ってるなら教えて？何かある、の？」

「……………彼らの指示には何も言わずに従って。お願い」

紗奈は状況を把握できていない様子で、一方で那澄は何かを考えている雰囲気。

お互いが、違うことを意識していた。

「……………彼らは、《解放軍》^{リベリオン}よ。下手に抵抗すれば、解るわよね」

「そ、そんな!？」

《解放軍》^{リベリオン}。それはこの世で最も知られた犯罪組織の名称。

「伐刀者^{ブレイザー}を『選ばれた新人類』、それ以外の人間を『下等人類』として位置づけ、その選民思想をもって『伐刀者^{ブレイザー}は力ない民衆を守るべし』とする今の社会構造の破壊を目論んでいる。」

「選ばれた新人類^{ブレイザー}たる伐刀者が『下等人類』を支配するという彼らだけの楽園を手にするために。」

「世界各国で有名なテロリストよ。正直、遭遇したくなかったわ」

「・・・なら、なんで落ち着いていられるの？」

「少し、訳ありなのよ」

「おいそこの二人！今から俺の言うことに従ってもらおうか！」

「・・・ゴメン、とにかく今は静かにしてて」

そして二人は男に言われるがまま、再びフードコートに戻ることもなかった。

そして監視されたまま、今に至る。

もう一度言おう。

なんとも無理な話である。

この状況下で二十人以上のライフル持ちを相手にできるほど、自分は戦い慣れていない。

かと言って紗奈と協力すれば良いという話でもない。

現に紗奈は怯えており、まともには動けはしないだろう。

伐刀者^{ブレイザー}とはいえ、結局は人間。

空腹になるし、疲れもするし、傷が深ければ死ぬ。

ただ少しだけ魔力を操る事ができるだけで命の危険は平等である。

そんな時だった。

「大きくなったなあ、那澄」

一人の男が軽薄な笑みを浮かべながら、ライフル持ちの男たちを掻き分けて近寄ってきた。

「……ふん」

途端に那澄は、自分の表情が強張るのを感じた。

すぐに持ち直したが、それすらも見透かしたかのように男は歩みを止めず、遂に

目の前の距離感まで迫ってきた。

「おいおい、随分と薄情だなあ！せつかく久しぶりにあったんだ、もつと喜べよお」

「……っ！」

「ア、アンタ誰よ」

男の態度に苛ついたのか、急に態度が変わった那澄を助けようとしたのか、口を開いたのは紗奈だった。

「あん？なんだお前」

男はそれが意外だったのかゆっくりと腰を下ろして、紗奈と視線を合わせた。

「か、勘違いしないで、聞いているのは私！ほら、とつと答えなさいよ！」

精一杯反抗しているが、恐怖している事が声の震えから感じられる。

「おいガキ！なんて口ききやがる！いいかあ、この人はなあ……」
紗奈の態度が気に入らなかつたのか周りにいた男の一人が、銃を構えて怒鳴り出した。

「はははっ、いいねえ、その反抗的な態度！いいだろう、その勇氣に免じて、お前の質問に答えてやるよ」

対して男は笑いながら、その怒号を止める。

「し、しかし……」

その反応が意外だったのか、尚もライフル持ちの男は何かを言おうとする。

「……おいそこのお前、聞こえなかつたのか？この俺が構わない
“って言うてんだが？”

その瞬間、今までの軽薄な笑みは突如として消え、次に現れたのは怒気だった。

「……っ、すみません！」

睨まれた男は、申し訳なさそうに元の位置に戻った。

「ああゴメンゴメン……で、何だっけ？ああそうそう、君の質問に答えてやるって話だったな」

そして男は先程と同様の、軽薄な笑みを再び浮かべて沙奈に話しかけた。

「さあ、どうぞ」

「……アンタ、リベリオン解放軍なんかやるより、俳優に転職した方が人気出るんじゃない？」

「ははは、よく言われるんだよなあ、それ。これは割と目指してみるのもアリかもしんねえな」

「……アンタ、ホントに何なの？」

「俺かあ？俺はなあ……」

「……いいからさっさと消えてよ。さっきから鬱陶しいのよ」彼の言葉を遮ったのは、今まで黙っていた那澄。

「おいおい、しばらく黙ってたと思ったら今度は“消えろ”だって。随分な口を聞くようになったじゃないか」

「……っ!？」

男は体制をそのままに、那澄の顔を覗き込んだ。

目を合わせないように慌てて顔を背ける那澄。

その反応が再び男を笑顔にした。

「相変わらず、冷てえ反応してくれんな。……お父さん、

悲しいぜえ。はっはははあ！」

その言葉を聞いた途端、那澄は男を睨み、隣では紗奈が驚いた顔で男を見上げていた。

「ああ、そうだよ、その表情！懐かしねえ！」

その一言を皮切りに、目の前の男の顔は、あの時死んだはずの晴澄、そっくりに変わっていた。

「……兄、さん？」

「なんだお前、アイツの妹だったのか。そいつあ良かったな、感動の再開だぜえ！」

あまりのことに驚きを隠せない紗奈に対して、男は愉しそうに笑う。

「……………お願いだから消えて、よ。彼女は何も……………知らないのよ」

「なあんだあ、それならそうと早く教えろよ。もう知ってるモンだと思ってたぜ」

「……………お願い……………します」

気付けば那澄は泣いていた。

泣きながら目の前の男がいなくなる事を願っていたのだ。

「……………そうだなあ、確かに今日はコイツらの引率に來ただけだし、最後までいると言われた訳でもないし。いいだろう、また会おうぜ」

「……………っ！」

「……………那澄」

そして男の顔はいつの間にか、元に戻っていた。

再び軽薄な笑みを浮かべて、男は立ち上がる。

周りのライフル持ちの男たちは止めようとせず、男は悠々と去っていった。

例の男が去ってから暫く経った時だった。

「お母さんをいじめるなあ————っ!!」

突然、大声が響いた。

声のする方向へ顔を向けると、小学生くらいの少年が銃解を構放えた
《リベリオン》の一人がアイスクリームを投げつけた。

「何しやがるこのガキいいいい!!」

決して攻撃力など持たないはずのソレだが、相手を激昂させるのに
は十分過ぎる程の効果を持っていた。

激昂した兵士は、少年に対して容赦なく蹴りを見舞った。

「あぐっ」

「シンジツ!」

少年の母と思われる二十代後半程の女性が人質の輪から飛び出し
てきた。

少年の弟か妹を身籠っているのだろう。

だが身重な身体を感じさせない速さで、それほどまでに必死な動き
で女性は少年と兵士の間に入り込んだ。

「おいガキイ!何してくれてんだあ!」

「オイ一体何してやがる!勝手な事してんじやねえよ!」

「うっせえ!このガキ、新世界の《名誉市民》たる……のズボ
ンを汚し……て!タダじゃ……ねえ!」

「だから……してんじや……ねえって!……さんキレん
だろうが!オマエだけ……俺らにまでと……来るだろうが
よお!」

「……あ……うう」

「ちよつと……那澄、ね……え!ねえつ……てば!」

兵士の怒号が、隣で自分を呼びかける紗奈の声が、次第に遠くなつ
ていく気がする。

意識が薄れていく中で、最後に聞いたのは勢いよく鳴り響く銃声
だった。

「……………ねえ」

「ん、どうかした？」

「……………もう一週間経つんだけど」

「まあそうだな」

少女が……………那澄が春澄と出会ってから一週間。

二人は寝転がって空を見上げていた。

「確かに、天気がいいのは結構な事よ」

「そうだろう」

「ただ見上げているだけ清々しい気持ちになるし、眠くなってくるもんね」

「そうだろう、そうだろう」

春澄は目を瞑ったまま、満足気に何度も頷く。

「でも…ねえ!」

「……………んお」

頷いていると、突如として那澄の声が近くなる。

ゆっくり目を開けると、こちらを覆いかぶさるように那澄顔を覗き込んでいた。

「んおっ!……………だっ!?!」

「……………きゃっ!?!」

驚いて起き上がると額に強い衝撃が走った。

それと同時に可愛らしい声が聞こえた。

「……………ぬぐううううああああ!?!」

「ううううう……………」

20過ぎの男のやかましい叫びと、10歳の少女の悲鳴が周囲に響き渡る。

「……………っ、だ、大丈夫か？」

「い、痛い……です」

素早く振り向くと、彼女は涙を浮かべてこちらを見上げていた。あまりに予想外な事で戸惑っているのか、敬語になっているがこれは伝えるべきか。

「つじやない!……い、痛いわよ!」

自分で気付いたのか、慌てて言い直すその姿が少し可笑しかった。

「……はははっ!」

「な、何よ!?!」

「いやいや、慌てて言い直すのが年相応だなあと」

「はあ!?!わかるように言っよ!」

「可愛い反応するんだな、と思っよ!」

「……な、は、はあっ!?!」

次第に赤くなるその反応が、再び笑いを誘った。

「はっははははっ!」

「い、いつまで笑ってんのよっ!?!」

「いやあ悪い悪い」

一頻り笑った春澄は、笑った事を謝罪する。

「ホントに謝ってるの!?!」

「ホントホント。ホントにすまないと思ってるさ」

「……どうだか」

その反応に、那澄はむすっとした顔で見続けてくる。

「どうしたら信じてくれるかなあ。……そうだ、笑ったお詫

びに、ほらこっちおいで」

改めて座り直して、彼女に向き直る春澄。

そして両手を広げて那澄に来るように伝える。

「……何のマネよ」

「何ってそりゃあ、お詫びだお詫び。どうした、遠慮してんのか?」

「……そんなの要らないわよ」

口では要らないと言いつつも、那澄の目は正直だ。

チラチラとこっちを見ては頭をブンブンと横に振っている。

正直になりたいけど、恥ずかしくて見栄を張る。

そんな年相応の葛藤が、可愛いらしく思えるが、口にしてはまた怒ってしまうのだろう。

「……まったく」

仕方ない、そう思っ立ち上がり、ゆっくりと那澄に近づく。

「なっ、ちよつと何よっ!?!」

急いで身構えるも、なんだかんだで逃げようとしないう那澄。

「これで、いいかなっ」と

那澄の正面まで辿り着いた春澄は、ゆっくり座って静かに抱き寄せる。

「い、ちよつ!?!はっ、ねえって!?!」

「はーい、落ち着いてねえ。さあさあ、痛いの痛いの飛んでいけー」

「……」

「痛いの痛いの飛んでいけー」

遂に正直になったのか、那澄が静かになった。

こっそり那澄の顔を覗き込むと、その顔は再び赤くなっていた。

「……落ち着いた?」

コクン、と那澄が頷いたのを確認して、春澄は彼女の頭を撫でる。

「よーしよし」

「……いつまで撫でてるつもりよ？」

「あれ、もういいの？」

先程までのしおらしきは何処へ行ってしまったのか、もういいと言わんばかりに那澄は身を振る。

「早く離してよ、窒息するじゃない」

「そんなあ、もう少しだけダメ？」

離れたい彼女と、離したくない自分。

「なんで私へのお詫びなのに、そんなに物足りないみたいなの反応になるのよ？」

「……娘成分の補充。間に合わないとお父さん倒れちゃう」

「勝手に変な成分を作るな。取り込むな」

「……はい」

渋々彼女を開放する。

立ち上がった那澄はゆっくりと伸びをした。

「でもまあ……」

顔を背けて、彼女は恥ずかしそうに呟いた。

「倒れられても困るから、たまによ。『たまに』なら……許可してあげなくもない、わよ」

恥ずかしがりながらも、嬉しそうに那澄はそう言った。

「それは……嬉しいな。お父さん助かるよ」

彼女の顔を見て笑ってしまった。

「……なんで笑ってんのよ？」

「正直なんだなあ、って」

「……うっさい」

「ゴメンゴメン。……それで？」

「何よ？まだ笑い足りないって言うの？」

「違う違う、用があったから話しかけてきたんだろ？」

「……そうだったわ」

どうやら彼女は思い出したようだ。

いや、今までの態度は別に、はぐらかすためにやったとかじゃない

んだ。

ホントに偶然なんだ。

「もう一週間経つじやない」

「ああ、そうだな」

確かに那澄が俺に『戦い方を教えて欲しい』と頼んできてから今日で一週間が経つ。

彼女と会ってから話を聞く限り、どうやら嘘を言っているようには思えなかった。

それに今では、一週間前のように『希望なんてない』とかそんな類の雰囲気は感じられない。

なら、俺も改めて向き合おう。

「だから、ね。私に戦い方を……」

「いいよ」

「教えて欲し……えっ?」

「いいよ」

「え……でも、前までは、ほら?」

返事があまりにも予想外だったのか、彼女は動揺している。

その動揺している姿が微笑ましく思えて、もう少し待ってみようかと思った。

でもせつかくの機会だから、正直に伝えよう。

「前までは、『とにかく生きていればいい』みたいな事を考えてるよ
うに見えてたから、引き受けなかったんだ」

「なら……どうして」

「那澄さ、さつき笑ってたじゃん。痛い事は『痛い』って声に出して
たし、照れてたじゃん」

「そ、それは」

「きっかけは何であれ、一週間前……初めて会った時には無かつ
た事じゃないかな?」

「……」

彼女は静かに頷いたのを確認して、俺は続けた。

「だから、『いいよ』って言ったんだ」

「よく……見てるのね」

「恥ずかしそうに、彼女はそう言った。」

「それはもう。まだ一週間だけど、これでも『那澄の父親』なんでね」

「……ありがとう、お父……さん」

「じゃあ、今日はもう暗くなりそうだから。明日から少しずつ開始だ」

「気付けば太陽が沈みかけている。」

「……うん！」

「てつきり文句を言われるかと思ったが、意外にも那澄は笑顔で従った。」

釈明という名の言い訳

「……………つと……………ねえ!?!……………起きな……………さいよ!」
「……………んう……………う」

自分に対して、かけられる声に、意識が引き戻される。
目を開けると天井だった。

「那澄、聞こえる!?!」

声のする方へ顔を向けると、そこには今にも泣き出しそうな紗奈が覗き込んでいた。

「叔母……………さん」

「良かった!……………って、誰が叔母さんよ!」

「ここは、何処よ?……………ん」

那澄はゆつくりと身体を起こした。

「病院よ。あなたが倒れた後、《解放軍》^{リベリオン}の奴らなら一人を覗いて黒鉄……………ああ、一輝さん達が無力化したわ」

「……………一人つて?」

「ああーつと、とんでもないクズでね、黒鉄……………珠雫さんの方ね、そいつが彼女に治療させようとしたんだけど。去年の七星剣舞祭代表の一人が突然現れて無力化したの……………まあそいつも嫌な奴だったんだけど」

思い出したらイライラしてきたのか、紗奈の表情が段々変わってきた。
た。

「そう……………だったの」

「でも安心したわ、どうにか『選抜戦』には間に合うわね」

その言葉に、那澄は耳を疑った。

「……………ひよつとして、日付け変わってるの?」

「そうよ。でもおかしいのよ、あなたの生徒手帳には実行委員会からのメールが入ってないのよ……………あ、勝手に見てごめんなさい」
その一言を聞いて、那澄は身体が強張った。

「別に怒ってないわよ……………でも」

「でも、何よ?」

しまった。

そういえば、まだ伝えていなかった。
てつきり『日曜に伝えればいいかな』でそのまま忘れていた。
どうしよう。

いや、今更どうしようもないけど………どうしよう。

「……ちよつと、気になるじゃないの」
……仕方ない。

こうなったら、もはや正直に言う他に手段はない。

「……不参加のメールを送った、わ」

「……え？」

「いやだから、ワタシ『選抜戦』サンカシマセン」

「……」

恐くて、紗奈の目を見れない。

それ以前に、この沈黙がただ恐い。

今すぐにも逃げ出したい。

「まったく那澄だったらあ、少し眠ってる間に冗談が上手くなったわね！」

「冗談……じゃないの」

「まったくまたー」

「そうだったら、良かったんだけどね」

「……」

「お姉……ちゃん？」

「……」

沈黙が長くなっているのは気の所為、ただひたすらにそう信じた
い。

「……もしもーし」

「……ねえ？」

「ハイ、オネエサマ」

「そういう事は、さ。もう少し早めに教えてくれても、さ。いいん
じやないかなーと私は思うんだけど」

お姉様、大変怒っていらっしやいますね、非常に怒っていらっしや

いますよ、とんでもなく怒っていらつしやいますとも。

「早めに教えて欲しいなあって思うんだけど」

「ハイ、オツシヤルトオリデゴザイマス」

「じゃあ、何を言うべきか解ってるわよねえ？」

両肩をガツシリ掴まれたのが解る。

これはもう、どうしようあるまい。

「自由参加って、言ってた訳ですしい」

「ん？」

「確かに権利は平等だけどね、それは断つても良いって訳ですか
らあ」

「だから？」

返事が速い。

怖い。

ただただ怖い。

圧が・・・圧があ。

「・・・・・・・・ゴメンナサイ」

「確かに辞退するのも認められているから、責めるのは筋違いなん
でしょう。でも・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「私、あなたと戦いたって、あの時の続きを」って思ってたんだ
けど・・・・・・・・まあ仕方ないかあ」

気付いたら、さつきまでの圧がなくなっていた。

意外にも好戦的というか素直じゃないというか。

「あと、戦闘シーン下手過ぎて読んでる方々に申し訳ない
なあ・・・・・・・・とか」

あ、それは無理だわ。

この作者に戦闘シーンとか・・・・・・・・書ける訳ないわ。

「・・・・・・・・じゃなくて！そんなどうでもいい話じゃなくて！」

「・・・・・・・・あえ？じゃあ何の話だったっけ？」

何故、突然今までの話を忘れたのだ。

まさか作者の・・・・・・・・いや、今は話題がズレた事を喜ぶべきだ。

とにかく、これで怒られる理由はなくなったのだから。

どうやら退院してもいいいらしかったので、私は素直に従った。

と言っても、部屋についた頃には夕方になっていた。

「うあー……疲れたあ。ああもうダメ、何がダメってそれはもう……何かダメ」

「部屋に入るなり倒れ込んでるんじゃないわよ、あと何がダメなのか、いっその事ハッキリ言いなさいよ」

「とうとうことで、あとはよろしくー……ぐう」

「あつ、ちよつと!? くら、寝るんじゃないっての!」

紗奈の制止よりも先に、私は意識を失った。

「ねえ、今更だけど。なんで旅してるのよ?」

休憩中、青空を見上げながら最近気になっていた事を聞いた。

「・・・なんていうのかなあ。色々と疲れてさあ、自分探してやつ?」

隣で横になっている「父親」からそんな事が返ってきた。

「その若さで?」

「いやあ、自分探しに若さとか関係ないと思うけどな」

「・・・ふーん」

「あれ、ひよつとして拗ねてる?」

「別に?正直に質問に答えてくれないのが、悔しいとかじゃないし?ホントにそんなじゃないし!」

「やっぱ拗ねてんじゃない?」

「だから、違うって!」

「まあ、そのうち話すよ。ほら休憩は終わり。今日は日没までやるんだろ?」

「・・・うん」

初めて訓練の相手をしてもらってから、未だに一度も勝てていない。

あれからまだ一週間も経っていない今日も、やはり変わらないのだろうか。

「なんだ、まだ勝てないからってそんなに落ち込む事はないんだぞ?というか、たった一週間で勝たれたら、俺の自信ボロボロなんだから、それに比べたら、悩んでる方がまだ可愛げがあるってもんだ。気にすんな!」

まるでこっちの気持ちが解るような口振りに、どう答えたらいいのだろう。

「まあこれでも父親なんでね、一応娘の心情も解るつもりさ。それに、かつて自分も通った道だ。焦る気持ちは痛いほどわかる」

「……ホントに?」

「そうだね、ならここで話を一つしよっか。ちょっと待ってよ
そう言ってお父さんはお湯を沸かし始めた。」

わからない気持ちを抱いた自分に

それは多分、3年ぐらい前のこと。
偶々、庭を通りかかった時だった。

「ねえ、お兄ちゃん。これ、どうやれば倒せるの？」

ある時、模擬戦用の人形を指し示して、年が10も離れた妹がそう聞いてきた事があった。

「それかあ、どうやってたかなあ。思い出せないから他の人に聞いてよ」

「いーやー！これ倒すのお！これがいいのっ！」

「だから他に聞きなって」

「お兄ちゃんじゃなきゃ、やなのお！」

「面倒くさい」、その一心で断ろうとしていた。

当時の自分は、大抵の事は何でも出来たから、特定の悩みだとか、そんなのとは縁がなかった。

だからかな、人が悩んでいるのを見ても、特に何とも思わなかったんだ。

それは、相手が妹でも変わらない。

その日も、いつもと同じように断ろうとした。

それなのに、その妹はこっちの事情もお構いなしに、いつもあとを付いてきて同じことをしたがって、それでいつも聞いてきていた。

「……他に聞きなっての」

うちには何人か門下生たちがいたから、いつもみたいに押し付けようと考えていた……のだが。

「いーやーなーのっ！」

「……」

「やーなーのー！……うっ、うう……ぐすっ、ひっく」

この日はそれが特に酷くて、流石に自分も限界だった。

「……何でいつもついてくるのき。何で、俺なの」

ふと、そんな言葉が口をついて出た。

「……えっ、うあっ!?ぐすっ……ひぐっ」

それでも泣き続ける妹に、僕はその理由を尋ねた。

「……だって、だってえ。お兄ちゃん、いつも一人でっ……
つまんなそうで」

「……」

「だから……わたしが……ぐす、いれば笑って……ぐす、くれるかなって」

不器用な……いやそれは僕の方が。

彼女は自分より10も年下なのだ。

そんな子に「察しろ」は無理というものだろう。

「じゃあ……一回、やってるトコ見せてよ」

「……ふえ？」

「教えるにはまず紗奈がやってるところ見ないとわかんないでしょ。だから見せてよ」

「……うん！」

紗奈は笑顔でそう答えると、すぐに木刀を構えて人形に向き直った。

ここで1つ説明しよう。

確かに「模擬戦用」とは言ったが、実はうちの庭にある人形、七星剣舞祭に登場した選手の動きをトレースして行動するハイテクマシンなのである。

数秒間一定の範囲に居続けると戦闘態勢に入るのである。

一体誰がそんなキツイ設定にしたかは知らないけど、唯一の救いは難易度設定ができることだろう。

「えいっ！……ぐあっ！？」

紗奈は下から斬り上げを狙うも容易に打ち返されてしまう。

「せいっ！……あっ！？」

しかし紗奈も打ち返された勢いを利用してそのまま一回転し再び斬りかかる……が、これは避けられてしまった。

「たあつ！……わきゃつ!？」

あれから暫く経つても一向に変わる様子は見られない。

むしろ、紗奈が押されっぱなしとなっている。

おかしい。

紗奈の年齢・訓練レベルなら『易しい・普通・ちよいムズ・ムズい・激ムズ』の5段階で易しいく普通位だろう。

しかも紗奈が「見てほしい」と言うなら、設定はちよいムズが妥当だろう。

そこでふと思ったことがある。

「本当に設定レベルが適切なのか」と。

杞憂なら別に構わないが、もし違ったなら最悪命に関わる。

なにせ、激ムズはエリアから出ない限り、延々と攻めてくる様になっっているのだから。

「……紗奈、ちよいストップ。一旦エリアから出て」

「せああつ！……ふえ？で、でもまだ……」

「約束は守るから、だから今はエリアから出て。早く！」

「う……うん」

最初は戸惑っていた紗奈だったが、なんとか聞き入れてくれた。

そして、紗奈がエリアから出たことで、人形はようやく止まった。

人形が止まったのを確認した俺は、人形の背中にある設定レベルを確認する。

設定レベルは激ムズ。

つまり、俺の勘は当たっていた事になる。

「……ねえ紗奈、これ誰に設定してもらった？」

「ふえ？兄弟子たちだけど……それがどうかしたの？」

その言葉を聞いた途端、俺の足はとつくに動いていた。

「……ホントごめん。絶対に約束守るから、明日にでも」

「お兄ちゃんっ……!?!」

向かった先は道場の外。

そこでは、二人の門下生が笑っていた。

『しかし、オメエはよくやるよなあ……あんなガキに』

『だってよお、生意気じゃねえか。俺達よりも年下のくせして、先に上手くなろうなんて』

『だけどよ、何も最高難易度にしなくてもいいんじゃないか？あ
りやあ、ガキの命に関わるって』

『おいおい、今更なに言ってるやがる。第一お前、この前の練習で終始
押されっぱなしで、師匠に絞られてイラついてたじゃねえかよ』

『は、はあ!?アレは……えっと、そうハンデ！ハンデくれてやつ
たんだよ!?!』

『だから、その仕返ししてやったんじゃない？それに、もしアイツが仮
に怪我でもしたら、師匠に怒られんのはアイツ。それで凹んでくれ
りやあ、多少は気が済むってモンだろ?』

『つハハハ！ちげえねえ!』

そうあの門下生たちは紗奈が訓練を始めてやる前から入門してい
た。

が、マトモに訓練することもなく、普段ダラダラとしているだけで、
そのくせ、紗奈が少しでも上達すると僻んで難癖をつけるのだ。

しかも、つい先日、調子に乗ってハンデつけて紗奈につ指導という
名目で勝負を吹っかけたが、ボロボロに負け、父師匠さんに絞られたのだ。
つまるところ、今回のことはあの二人の憂さ晴らしというヤツだろ
う。

「……くだらない」

そう言い捨てて、俺は二人に近づいた。

『ああ?つたく誰だって……おおつとこれは春澄坊っちゃんじゃ
あないかスか。俺らに何かご用でも?』

『おいおい、もう坊っちゃんはやめといてやれよ。もうそんな年齢じゃねえだろう』

『おおっとお！そーいやあそーうでしたね』

そうは言いつつも、笑っている。

アンタらホントに僕よりも年上なのかよ。

「・・・アンタらか」

『はあ!?よく聞こえませんねえ』

『もつと声張って言ってもらっていいすかあ?』

「アンタらがアレを設定したのかって、そう聞いてんの。別に訓練のために厳しくすんのは構いやしないけどさ、真面目に取り組んでる奴をストレス発散の為だけに潰すのは違うって、そう言ってるの。負けたのだってアンタらの練習不足とアイツの練習の成果が現れた結果だろうに」

『はあ?とんだ言いがかりは止してくれよ』

『そうそう。第一俺らはずっとここにいたっての』

まだ言うか。

しかし、こいつらは『言いがかり』といったのだ。

特に言及した訳でもないのに、だ。

つまり、それは自分がやったと言っている様なものだ。

「さつき 何かご用でも」って、そう言つたよな?」

『はあ?んだよ急に話変えやがって。いや、確かに言ったけどよお』

『まさか、俺たちに何か頼むつもりだったんすかあ?』

『ハハッ!?だったら、頼み方ってモンがあるよなあ?』

「別に頼むって程じゃない。ちよつとした憂さ晴らしに付き合ってもらうって話や」

『はあ? 訳わかんねえつつの』

『まあまあ、きつとそーいうお年頃なんだろうよ。何も言わず付き合ってるのも、年上の余裕ってやつだろ』

『ハッハァー!物好きやつだな。って訳だ坊っちゃん、その話乗ってるよ。んで、俺ら二人に何頼もうってんだよ?』

この反応は少し予想外だったが、まあいいか。

どのみち乗ってもらおうつもりだったわけだから。

「内容は至ってシンプル。俺と対戦して欲しい」

『はあ!?!』

「憂さ晴らしだよ。アンタらはこの前紗奈にやられたときの八つ当たりになる。ほら、簡単でしょ?。」

その言葉を聞いた二人の雰囲気は少し変わった。

『ほっほお!?!』

『嬉しい提案だけどよ。俺らにもメリットとかないんじややる気も出ねえつての。そこんところ、もうちつと考え足らんくね?』

「あつれえ!?!もしかして、自信ないんですかあ?なるほどなるほどお年下相手に怖じ気ついてるんですね。でもそれはバレたくないから文句言ってる、と」

『………オイ』

『流石に言い過ぎじやねえの?もし今撤回したらやり過ぎないでいてやるよ』

「ああ、ハンデ付けるの忘れてました。いやあスンマセン。ハンデはそうだなあ……俺は徒手でやるってどうです?勿論兄弟子たちは二人同時にどうぞ。あ、木刀も忘れないで下さいね」

『………ッ!』

『ぎげんなよ!』

「あ、今からスタートですからね。道場に上がるのも面倒なんで、このままココでやりましょうか」

こうして俺の憂さ晴らしは始まった。

『うらあー!』

『………ツ!』

「………」

頭を狙った大振りど、腹部を狙った突き。ダラダラしているとはいえ、流石に訓練しているだけあって鋭いが、捌けない程じゃあないから、左右にステップして躲す。

『つてめ!』

『………ナメんなツ!』

次は横からの斬りつけと、斜め下からの斬り上げ。

これはバックステップで避ける。

結果として、二本の木刀は互いに空を切る事となった。

開始から二十分後。

『ぜえ……ぜえ……くっ……そっ!』

『……はあ、はあ……』

「もう終わり……ですか?」

息の上がつている二人とは対象的に物足りさを感じる自分。

「まあ準備運動にはなったんでソコは有り難いですかね。じゃあ、

今度は僕から行きますよっつと!」

この二人も気は済んだだろう。

今度はこっちの憂さ晴らしに付き合っつてよね。

『も、もういいだろ!? 悪かったって!』

『だから、な!?! もう勘弁してくれよ! ホントに悪かったって! もう絡まないからよお!?!』

さつきよりも激しく息を切らせて、その上、座り込んでいた。

「……………約束、守って下さいね?」

憂さ晴らしを終えた時、太陽は沈みかけていた。

悔しそうに座り込む二人を尻目に、俺はその場を離れた。

「……………」

流石にもういないだろう。

面倒だけど、明日にでも紗奈のところに向かうか。

そう思っている。

「……………くう」

縁側で座りながら寝ていた。

ずっと待っていたのだろう、既にうたた寝というレベルではなかった。

静かに隣に座り前に倒れそうになっている頭を自分の肩に乗せる。

「……………つたく、頼んでもないのに待たれてて、それで怪我させられても困るっての」

「……………う」

起こしたか、そう思って顔を覗くも、まだ起きてはいなかった。

周りは自分よりも年上で、唯一の年が近い奴と言えば、俺だけ。

しかし、その僕も普段は訓練に出ることはない。

となれば、自分だけで訓練する他ないだろう。

「年下っただけで甘く見られない様にするには、そりやあ必死に訓練して示すしかない……………よなあ」

それから更に時間が経って。

辺りはすっかり暗くなっていた。

さて、そろそろ起こすか。

「……………んで、いつまで寝たフリしてるつもりでいんの?」

「……………なんのこと?」

「返事した時点で自覚してんじやん?」

そう返すと、紗奈はむくりと体を起こした。

「ふわぁ……………それじゃ、今からお願いね」

「マジか……………まあ、待たせた訳だからな」

そう言っつて、紗奈は木刀を構えて、人形の前に立った。

「んじや、設定するから。あ、難易度はどうすんの？」

「さつきと同じがいい」

「……………つまり、激ムズか」

「そうなの！」

「背伸びし過ぎだっつの……………ほい、普通ね」

「……………ぷう」

「文句なら普通レベルに圧勝してからな……………ほいよ、スタートつと」

拗ねる紗奈を尻目に俺は人形を起動した。

「……………もう！」

膨れながら紗奈は右方向からの袈裟斬りを仕掛けた。設定レベルが違うから人形は今度は受けに入った。

「なっ!？」

「受けられたらどうするか考える。避けられたらそのまま動けるけど、受けられたら一旦動きが止まるんだから、その状態で何か出来ることに繋げるの」

「ちよっ、いきなり、そんなに!？」

驚いた紗奈は人形から離れた。

「力押しで行けるならベストだけど、まあそんなに上手くいけば苦労はしないよ。それと、さつきも思ったけど、紗奈って踏み込みというか初撃が速いの。それは武器になるからもう少し活かしやすい得物を使ってみなよ。ほらコレ」

距離を取ったのをいいことに、偶々持っていたナイフ型の木刀を投げた。

「あと、手首柔らかいだろ。なんならそれも活かせば楽できるよ。見にくい角度から攻めたりとかね。敢えて下から攻め込むことで相手の対応を少しでも遅れさせるの。人っつて自分に対する斜め下からの動きに、なかなか対応出来ないからソレを狙うのは有効かな」

「え……ええっ!？」

「もう……無理」

「はーい、終了了」

開始から一時間くらい経った頃だろうか。

紗奈はギブアップを宣言したのを確認して人形を停止させた。

「最初は全然だったけど、最後ら辺には何回か成功してるから、まあいいんじゃないかな。ただ闇雲に打ち込むよりもこんな感じで自分の特性を活かして訓練する方が遥かに効率がいいよ。……とはいえ、そう滅多に自分じゃ気付けないから早く気づくためには誰かに見てもらうしかないけどね。あ、今日のは気まぐれだから」

「……つつかれたあ」

「普段と違う動き方すれば、そりゃあそうなるよね」

「ねえお兄ちゃん」

「……ん」

「お兄ちゃんはその人形で訓練とか、しないの?」

「するも何も、アレ最高難易度終わってるし」

「……」

「……くう」

「まあ大抵の事は出来るからね仕方ないね。人には得手不得手があるんだから、そんなに悔しがる事ないぞ」

「……泣くよ?」

「ご自由に……存外タフだね」

そう言っただけは自分の部屋に戻るために足を動かした。

「……あ、そだ。俺、暫くこの家出るから」

「……え?」

「自分に欠けてるモノ、今確信した。ちよいと捜し物に出かけるから」

「……」

呆然と立ち尽くす紗奈を置いて、部屋に戻った。

娘成分の補充はお早めに

その後、自室にて。

多分だけど、今回のことは父さんにバレるだろう。

それも、あの二人が自分に都合のいいような伝え方で。

仮に反論したとしよう。

『知らん。障害を自力で解決できん奴に教えることなど何も無い』

どうせこんな感じで終わりだろうよ。

でも、それだとあの二人はどうだというのか。

『それも奴らが選んだ道。むしろその程度の事、己の力のみで解決

してみよ。それだけか？なら話は終わりだ』

そこでふと考えた。

俺は正直、紗奈がなんで人形相手に負けているのかわからなかった。

あの二人が何故ソレをやったのか理解できなかった。

どうして自分がソレを理解できないのだろう。

ずっとこのままでいいのか、と。

だからこそ、さっきの言葉。

きつと動くなは今しかない。

明日・・・じゃあ遅い。

「・・・よし」

そこからはあつという間だった。

物は最小限に、行く宛も大まかに、それっぽい装備も揃えて直ぐに家を出た。

が、旅に出たからと言って、当然すぐに見つかるとはなかつた。

人に聞けば、その人その人で感想は違うし、簡単に言葉で表せるかわわれればそうでもない。

そんなこんなで必死に探しているうちに気づいたら海を国を渡つていた。

伐刀者ブレイザーだからと目の敵にされたり、野盗に勧誘されたり、こつちの事はお構いなしに「対戦しろ」と言う者もいた。

《解放軍リベリオン》と戦う羽目になったりもあつたな。……まあ、なんとかしてきたけどね。

でも、一年経つても見つからない事に流石に焦つてさ、一旦頭を冷やす為に日本に戻つてきたの。

そんなときに君と出会つたということさ。

「……つまり、未だに見つかつてないって事ね」

「そうなるね。お、丁度湧いたね。はい」

「ありがと。……にしても、あんまり焦つてる風には見えないわね」
「そこはホラ、大抵のことはできちやう質でして。ポーカーフェイスも上手いのさー!」

「……なんにもできない私からすると嫌味にしか聴こえないから苛つくわね」

「でも、那澄ニトと紗奈サナにあつて、僕にはないものもあるんだよ?」
その言葉を聞いて、ふと顔を上げる。

「何よソレ」

「ひたむきなところ、かな」

「お父さん、は違うの？だって探してるじゃない」

「確かに探してはいるけど、〝どうしても必要〟ではないんだよ。俺の場合は人と接するのに足りないモノの正体を知りたいから探してるだけで。〝ひたむきさ〟も確かにないけど、それとも違うんだよな。なんて言えばいいのかな。興味本位？好奇心？」

「めんどくさいわね」

「自分から聞いというて酷いなあ、お父さん悲しい」

「娘、嬉しい」

「すんごい辛辣!? さつきと態度が全然違うじゃん!? そんなに苛つくポイントあった!？」

「だって、さつきの話を聞く限り妹さんには助言しといて、私には大して教えてくれないじゃない」

こんなこと言うつもりじゃなかったのに、恥ずかしいわね。

だって、妹さんには気付かされたのに、私からは何もないとか、別に負けて悔しいとかじゃないってのに。顔が熱くなってきたわ。

それにさつきの話してる時の顔が、格好良・・・

「それはまさかの嫉妬かな」

きつと気の所為ね。

錯覚よ。

「腑抜けた事言わないでよ」

「照れ隠しも成長の証・・・くうう、悪くない!」

「.....」

「よつと」

無視してたら急に立ち上がった・・・と思ったらこっちに近づいてきた。

まったく、一体何するつもり・・・

「・・・ギョ〜」

「はっ!? ちょっと何してんのよ、ああもう!」

「娘成分の補充はコレに限るってね」

「随分とまあ燃費悪いのね」

まったく、ホントに驚いたわ。

他にも方法があるでしょうに単純なんだから。

「・・・あれっ、ひよつとしてセクハラになる?」

「なるでしょうね」

「まあ、処罰は任せるよ」

あつさりしてるところが、逆に苛つくわね。

これも思惑通りかと思うと、ホントに腹立たしいっただらないわね。

「・・・なら、アドバイス有りの訓練で手打ちにしてあげるわよ、お父さん」

「じゃあ、いつでもどうぞ」

「・・・」

開始を伝えたにも関わらず、那澄はいつこうに動かない。

「どうかした?」

「固有^{デバ}霊装^{バイス}を構えないのは、優しさのつもりかしら?」

「・・・ああ!そういうことか。いやだって妹と同じようなアドバイスが欲しいって言うから」

「別に、同じにして欲しい訳じゃないし。妹さんよりも手厚く訓練して欲しいだけだし」

「まあ今のところ、その予定はないかな。流石にマズイと思ったら構えるけどね、当分は様子見かな」

「あつそ。なら遠慮しないから、ねっ！」

右横から首を狙った一撃。

ふふっ、甘いぞ娘よ。

その程度、半歩後退するだけで躲せるというものよ。

「くっ!？」

思っていた通り、漆黒の大鎌は目の前で空振り。

ほらな、言わんこつちやない。

「……つならー！」

今度は顔目掛けて突き刺してきた。

大したもんだ。躲された後の事も考えて攻めてくるなんて。

……まあ避けるけどね。

今度は左にステップ。

これで大鎌を構え直すしかない筈……だ!?

「あつま〜いっー！」

なんてことだ。

突きの勢いをそのまま利用して地面に刺すことで体全体を使って蹴り技を繰り出すなんて。

自分の体が軽いということ、そして固有^{デバイス}霊装が自身と違い大きく重いということを理解しているからこそできる攻め。

「ぬおっ!？」

「ちっ」

あ、焦った。

避けるだけで済ませようとしてたのに、思わず手で防いじやった。

「最初の一撃、避けられるのを前提に繰り出したね?」

「……当たり前でしょ。一撃で仕留められれば苦労なんてしないわよ」

「それで、俺が後ろに下がるのも見越して突き技も出した、と」

「まあ・・・避けられたけどね」

「でもその次は流石に焦ったよ。まさか蹴り技で来るなんて」

「得物だけで仕留められればそれでいいけど、そんな簡単には行かないそうだったから、思いつきでやっただけよ」

マジかく、アレを咄嗟に出来ちやうのか。

それもそうか、年は同じでも那澄は妹とは違うんだ。

アドバイスだけで、済ますのはもったいないかな。

「よっ」

「あら、どうしたのかしらお父さん？固有^{デバイス}霊装は使わないんじゃないかなかったの？」

「そのつもりだったんだけどなあ、ちよつと気が変わってね。ああでも攻めに使う事はないから、安心して」

「構えてくれるのは嬉しいけど、やっぱり嬉しくない！」

「・・・もうちつと素直になってよ。頼むから反抗期は勘弁して、まだ悩みたくないの」

「それは気分次第、ねっ！」

迫りくる大鎌に対して、ナイフを構え直す。

那澄は恐らく魔力量が多い。

さつきまでの攻めで息を切らしていないのは魔力で負荷を減らししているからだろう。

それでも制御は出来ていないのか、時々余分な動作が目立つ。

迫る斬撃をナイフでいなしながら口を開く。

「さつきまでのは相手が避けてたから出来たけど、今みたいに弾かれたり防がれた場合は考えた事ある？」

「それはその、相手の固有^{デバイス}霊装にもよるけど、大ききで押し切る・・・とか」

「まあ間違つてはないかな。でも正しいとも言い切れない。単純な力で勝負するならそれでもいいけど、相手が^{ブレイザー}伐刀者の場合は、それじゃ足りない。せつかくだから魔力も活かすべきだ。例えばこう、自分だけの技とか」

「とはいっても・・・そうそう思いつかない、つての！」

「後は、防戦一方に追い込まれた時とか、さっ！」

「・・・ぐっ!？」

「まあその辺の立ち回りは追々かな！」

「きゃっ!？」

「はい、お父さんの勝ちー。ふっふっふう」

「・・・むう、攻撃しないとか言ってたのに。ズルいわよ」

結局そのまま押し返されてしまった。

「まだまだ娘に負ける訳にはいかないからな、悪く思わないでくれよ」

しかも自慢気だし。

腹立つわね・・・いやでもお父さんの方が正しいといえはその通りなんだけど、それは別っていうか。

「というわけで今日は終わりにしようか。そろそろ暗くなつて・・・」

「えー」

「断るのはいいけど、せめて最後まで言わせてよ。あと途中で被せるのヤメ・・・」

「てあげません!」

親子の形（前編）：いつだって君のことを

「ちっ、下らねえ！おい、ホントにあいつがターゲットで合ってたろうな。違ったら容赦しねえよ？」

「はっ隊長、間違いありません！」

気づいたときには今の組織で育てられてきた。

小せえ頃の記憶といえば最低限の衣食住に、常に死と隣合わせの訓練。

孤児院という体で活動している組織は、裏じゃ金のためならどんなこともやる。

つまるところ、任務のための駒を育てるのに都合がいいから孤児院を名乗っていただけだ。

正直、駒扱いされんのは気に入らねえが、任務を果たせばそれ相応の報酬を回してくれるから従ってただけだし。

善悪の区別も出来やしない空っぽな俺が生きていくにはソレしかなかったから逃げようとは考えたことすらない。

特技といえば変装ぐらいなもんか。

そのまま、ただ任務を終えてはぼーつと生きていた時に一つお達しがきた。

曰く、ある男に関連施設の正体がバラされたから、組織にたどり着かれる前に消せて奴だ。

つたく、タダでさえ久々の休暇中に任務を押し付けられた時にはキレそうだったが、その上「隊長」だあ？

「気は進まないが生きていくには仕方ない。」

組織が用意した情報を使って、それっぽい男を見つけて以降監視してきたが、んだよアレあ。

ガキ相手に笑ってんぞ。

「つたく、気に入らねえ！」

「……なんで俺がイラついてんだよ？」

嫉妬？

羨望？

憧憬？

どうでもいいが、アイツが笑顔で満ち足りてんののに、俺だけが振り回さんのはマジで気に入らねえ。

「しかし、隊長！」

「あん？」

「どのように仕留めますか？」

「はあ？何コイツ、俺に責任押し付けようとしてんの？」

「どうせアレだろ、言い出した俺のせいになろうって考えてんだろ？」

「んなもん、あのガキ諸共消せばいいだけ……待て」

「ただ消すだけじゃつまんねえ。」

「せつかくだ、ガキも利用すりゃあいいか。」

「おいテメエら耳貸せ、せつかくの外だ。楽しく仕事して楽しむぞ。……いいな、ミスって俺の仕事増やすんじゃねえぞ？」

「よろしいのでしょうか？『早急に』というのが、上からの指示なのですが」

「なに文句タレてやがる、さっさと従えつてのに。まあいいや、俺が言いたいように、コイツラにも思うところがあんだろ。」

「構いやしねえよ。第一、一方的に『処理しろ』って言った割に何の情報も回さねえんだ。そんなくらい融通効いてくんなきややりようがねえだろ？」

「それは……そうですが」

「なら情報は自ら集めるしかねえ。いいか？期限はねえが、俺の我慢も長くはねえ。わかったらさっさと集めてこい」

「頷いた部下共は一斉に散っていく。今この場には俺一人だけになった。」

「俺の休暇を奪ったんだ、タダで楽にさせるのはつまんねえからよ。せいぜい楽しませてくれよ。」

「自分の口角が上がっていることに男は気づかなかった。」

那澄との訓練で驚かされてから1週間ほど経過した、少し曇った日のことだった。

那澄と出会って長くはないが、まあそれなりに経った。

最初こそ生きる意味を知らなかった彼女だが、今ではそんな印象も嘘かと思うくらい明るくなった。

(もういいんじゃないか？最初こそ放っておけなくて娘だ訓練だと接してきたが、彼女は一人でも生きていけるだろう。問題はいつ、それを伝えるかだ。出来ることなら喧嘩別れはしたくない。なるべく穏便に済ませるほうがいいだろう。それに、俺も探し物を見つけられてないしな。宛のない旅に彼女を連れて行く訳にもいかない。それに、紗奈のところに行つた方が、歳が近いこともあつて仲良く出来るだろう。何より、危険な事に巻き込みたくない)

テントから那澄が出てきて伸びをしながら口を開いた。

「んーう、ねえお父さん、今日は何を教えてくださいの?」

「そうだな。でも訓練の前に提案があるんだ」

「何よ改まつちやつて、お父さんらしくない」

お父さん、今でこそ当たり前のように口にしてくれるが、最初の頃は酷かった。それこそ恥ずかしくて言えないなんてものではなかった。アンタ、ねえ、ちよつと、どれも今からではまるで想像できない程に、酷いものだった。それが、時間が経つごとに照れながらも、お父さんと呼ぶようになり、今では特に気にする様子もなく呼んでくれるようになった。勿論それは喜ぶべき事だ。ようやく彼女が人を頼むということを選べるようにまで成長したのだから。

でも、だからこそ、今から告げる言葉が成長した彼女を傷つける。そう理解している。故に、この結論に至つた自分の考えが許せない。

「なあ、日本に、俺の妹に会つてみないか?」

「なあにそれ、いきなりどうしたの？ひよつとして、次の訓練のため？」

自分の目的のために、彼女を預ける。そんな醜い俺の考えなど知る由もない那澄が笑顔で聞いてくる？

「・・・ああ、そんなところかな」

かつてないほど言葉に詰まる。息が苦しい。他の選択肢が見つからない。那澄の顔を素直に見れない。

「いいわ、だってお父さんも一緒でしょう？だったら私は文句なんて言わないわ。それで、いつ行くの？準備だつてしないとかだら・・・」

「いや、那澄一人で、だ」

「・・・は？」

那澄の雰囲気先ほどとは別のものになる。

「那澄一人だけで、日本に行ってもらおう」

「じよ、冗談でしょ!?だつて・・・」

「いいや、冗談なんかじゃないよ。そもそも話、隠してて悪かったが、俺も用があつて旅してる。宛もない旅だ。那澄にはキツイだろう。迷惑だつてかけるし、何かあつたとしても庇い切れる訳じゃない。危険な目に遭わせる事になる。それと比べれば日本はここよりも遥かに安全だ。なにより、妹なら歳も同じだから接しやすくだろう」

「・・・」

「行き方がわからないなら、俺の伝手で安全に行けるように手配しよう。なに、皆いいやつだから困ることもないだろう」

「・・・んで」

「それに困つたやつ等だが、なんだかんだで頼りになる」

「・・・なんで！」

那澄の声は、静かで、それでいてよく響く、そんな声だった。立ち上がった、一枚の紙を見せる。

「なんだつたら紹介状だつて書いてある。ほら、これを見せれば・・・」

パシッと、一枚の紙が払われる。

それは今まさに、俺が那澄に渡そうとした紹介状だった。

ポツリ、ポツリと雨が降り始める。それは、何も持っていないままの自分の右手を静かに濡らしていく。

「那澄………」

顔を上げると、那澄の頬には涙が伝っていた。

「なんで泣くんのだよ？安全に生活出来るんだぞ？安全に訓練できるんだよ？それなのに………」

右手に雨がどんどん振り続ける。いや、雨だけではない。那澄の涙も、彼女の頬から落ちてくる。

「降ってきたな。濡れる前にほら受け取って」

落ちた紙を拾って、もう一度彼女に差し出す。

「わからず屋!!どうして、どうしてわかってくれないの!!私は、私が本当に欲しいのは………」

しかし、彼女がそれを受け取ることはなかった。

否定し、それでいて尚自らの考えを口にしようとして、そして走って行ってしまった。

「……那澄っ!?!」

呼び止めるも、それだけだ。

彼女を追いかけようと、この体が動くことはなかった。

まるで、そんな自分を罰するかのようになり、雨が強くなり、この体に激しく打ち付ける。

何が間違っていたのだろうか、なんて考えること自体が間違いだ。きつと彼女は自分も一緒だと思っていたのだ。それを俺は……。

そのまま突っ立っているとザツザツと草を踏む音聞こえてきた。

「………那澄?」

しかし、呼びかけに対して返ってきたのは彼女の声などではなく、ガチャガチャと無機質な音だった。

「はっ・・・はあ・・・はあっ」

どこまで走っただろう。胸が苦しい。足が重い。絡みつくように打ち付ける雨がうっとおしい。構うものか。私はそのまま森に入る。一際大きい木を見つけ、それによりかかりながら座り込む。

「どうして・・・あんなこと言っちゃったんだろう。もつと素直に、穏便に答えたはずなのに」

わかっている。きつとお父さんは私に無事でいて欲しくてああ言っただ。先の見えない旅に巻き込みたくない、怪我してほしくない、そう思つての結果だったのに。それは嬉しい。だって心配だつて言ってくれているのだから。・・・でも私は、それでも私にきて。一緒に探してほしい”と、そう言つて欲しかった。だって私にはお父さんしかいないから。生きていくための手段。安全に朝を迎えるための方法。固有^デ霊装^{バイス}を使つての戦い方。どれも、お父さんに教えてもらった事だ。なにより、お父さんと過ごすだけで、私は十分だ。ふと、遠くでガサガサと草や枝を掻き分ける音が聞こえる。

困つたな、どんな顔して会えばいいのかわからないや。

「おーい、どこだー？」

声は次第に近づいてくる。

「おーい？返事を・・・見つけた。良かった無事だったんだね、心配したんだよ？」

草木を掻き分け、座り込む私に手を差し伸べる。

「あ……その……えっと」

まずは謝らなきゃ、そう思っていたのに、口を出たのは今にも消え入りそうな声だけだった。

「どうしたの？」

「自分で、立てるから」

いつまで素直になれない私は、謝ることすらできずにいる。

「そっか。じゃあ落ち着いて話をしよう」

急に、お父さんの雰囲気を変化した。いつまでも立とうとしない私に怒ったのか、恐る恐る顔を見上げるも、その顔は穏やかだった。

「実は、さつきまで捕まっていたんだ」

何を言っているのか、理解できなかった。だってついさつきまで一緒にいたではないか。

「何、言ってるの？だって……」

「脱出したのは本当についてさつきなんだ。というのも、ここ最近に変な奴らに狙われていてね。まあ、原因は俺にあるんだけど。捕まったのは明け方だ。その時は君はまだ寝ていたし、連中も騒がれるのは嫌だったのか君を放置していたんだ。加えて俺が捕まったのをバレないように偽物で君を騙していたんだ」

「……そんな」

「その偽物があることすら今さつきまで知らなかった。君の身を案じて逃げ出したら、君と俺に変装した男がいたんだよ。急いで向かうとしたんだけど、その前に君が走り出してしまったからね。後を追ってここまで来たんだ」

だからだろうか。普段のお父さんだったら決してあんなことは言わない。いつだって、私のためになることをしてくれる。つまり、さつき私を突き放したのは偽物だったから？

「でも、こうして伝えることができて良かった。さあ行こう、偽物を消しに。手伝ってくれるかな？」

だったら、今こうして私の欲している言葉を話す方が本物なら、私が協力するべきは……。

私は立ち上がる。それを確認するとお父さんは森を出ようと歩いてく。見失わないように追いかける中で、私はふと違和感を感じた。この森に入ってからお父さん、私のことを名前で呼んでない。普段は『那澄』って優しく呼んでくれるのに。

「ま、待って!」

「急がないと、あの偽物を始末できないからね。ゴメンよ、今だけはそれを認めることはできない」

歩きたび、私の足がテントに近づく程、お父さんの口調は厳しいものになっていく。

それほど、自分に化けていた事が許せないの？

「見えた……ちっ!んだよお、もうちっど消耗させとけよなあ。使えねえ部下共が」

なに、今の声?まるで、いつもと全然違う。ナニカを根本から否定するかのような冷たい声。

「お、お父……さん?」

「うん、どうかしたの?」

見上げてても、その顔は笑顔のまま。まるで、貼り付けたかのような。

「ううん、なんでもないわ」

「そうか。……あそこに偽物がいるのは、見える?」

「ええ」

お父さんの指し示す方に目を凝らすと、お父さんが、いや、お父さんの姿をした偽物が立っているのが確認できる。そして、その足元に

は同じ格好をした、ヘルメットの人が何人も倒れている。

「ねえお父さん、あの倒れている人たちは？」

「あの人たちは、偽物を捕まえようとしていたみたいだね」

「……じゃあ、お父さんの仲間なの？」

「ううん、ちよつと違うかな。あの人たちはどうやら別の所から来たんじゃないかな。調べただけど、あの偽物はどうやら他の国でも悪いことをしてたみたいなんだ。だからその罪を償わせようと、あのヘルメットの人たちは捕まえに来ただけど、偽物に反撃されたようだね」

「……そんな」

「そう、それは悪いことだ。で、俺の旅に出た目的はそんな悪いやつを捕まえることなんだ」

あの偽物こそが悪いやつ。お父さんの旅の目的。

「私も……手伝うわ」

「……いいのか？危険な事なんだよ？」

だって、アイツを捕まえることで、お父さんの目的が果たせるなら、そしてその後は再びお父さんと一緒にいることが叶うのなら……

「お父さんを手伝いたいの」

「そっか。なら頼らせてもらおうかな」

「うん！」

私は喜んで、お父さんに協力するわ。

「・・・まったく、なんなんだコイツラ。伐刀者^{ブレイザー}つて訳でもないし、か
といって本気で仕留めようとしているの感じもなかった。まるで、何
かが来るまで時間を稼いでいるかのような」

急に襲ってきたから何事かと思つて、つい対応してしまった。今は
動かないが、気絶しているだけだ。

正直なところ、心当たりはある。この国に来てすぐのことだ。何か
探しものに関係する情報はないか、そんな気持ちで街をぶらついてい
た時、どうやらある組織が孤児院と称して集めた子を実験に使ってい
る、という噂を耳にした。自分には関係のないことだ。いつものよう
に割り切つて、聞かなかつたことにしよう。そう思つていたのに、ふ
と紗奈の顔が頭をよぎつた。顔も知らない子たちが、あの日の妹のよ
うに虐げられるのかと思うと、居ても立っても居られなくなった。

すぐにその噂の詳細を聞いて、孤児院に向かつた。

噂は、本当だつた。人を人とも思わない扱い。倒れた子はまるで存
在しないかのように扱い、残つた子供だけを世話する。そして残つた
子たちの中でも、更に優秀だと判断した子供は、その施設の兵士とし
て育てられていく。

見ていられなくて、放つておけなくて、それ以前にそんな行いをし
ていた奴らを許せなくて。その施設の正体を世に公表した。もちろ
ん、実験されていた子どもたちを開放した上で、だ。

施設は封鎖、関わつていた奴らは捕まり、子どもたちは安全なところ
へ保護された。

でも、その行いをしていたのはその施設だけではなかった。他にも
関連施設が存在していたのだ。しかし、それはつい最近になつて知つ
たし、なにより那澄がいたから動くに動けなかつた。

だから今、足元で気絶しているコイツ等はその関連施設が仕向けた
のだろう。

こうなることはわかっていた。だからそれより先に那澄を日本に
行かせようとしたのに・・・そうはならなかつた。それどこ

ろか、泣かせてしまった。

「……………なにやってんだか」

コイツ等みたいなのが他にもいるかもしれない。ひよつとしたら那澄を人質に取られているかもしれない。

そうなるよりも先に那澄を見つけなければ、そう思つて足を動かさうとした時。正面から那澄がこっちに向かつてきていた。

「那……………澄？」

雨が酷いせいではつきりとは見えないが、那澄の隣に誰かがいる。あれは……………俺、なのか？

親子の形（後編）：いつまでもアナタの事を

「大丈夫、普段の訓練どおりにやれば倒せるよ」

「……うん」

お父さんと一緒に偽物のところまで近づく。ヘルメットの人たちはピクリとも動かない。すべてこの偽物がやったのかそう思うと恐怖が押し寄せてくる。手が震える。呼吸が浅くなる。私もこの人たちのようになってしまふのか、一度そう考えると、さっきまでのように体を動かせない。

「大丈夫、独りじゃない。俺と一緒にいるから」

お父さんの言葉が頭に響く。

大丈夫、ダイジョウブ、だいじょうぶ、わたしはひとりじゃない。

「那澄、どこに行つてたんだ？心配したんだぞ。それに、隣いるのは誰だ？」

偽物が話しかけてくる。

「耳を貸してはダメだ。アイツは、君を騙そうとしているんだよ」

「怒ってる訳じゃないんだ。ただ説明している時間がなくて、ああするしかなかったんだ。だからほら、こっちに……」

「ほら、ね。アイツは君を取り込もうとしてるんだ」

さつきから自らの言葉を遮るお父さんに苛立ったのか、偽物が声を荒げる。

「おいお前。コイツ等の仲間なんだよな？さつきから人の言葉遮つて、どうしようってんだ！」

「そんな偽物は倒さないと、始末しないとイケない」

始末、偽物は始末しないと。そしてお父さんとまた一緒に。

「……塗り潰せ、不知火」

優しく木霊するお父さんの言葉に従って、私は漆黒の大鎌を展開する。

「ッ!?!……那澄！」

驚いた偽物が私を止めようと叫ぶけど、構うものか。私にはお父さ

んがいればそれだけでいい。

「……ッ！」

鎌を斜め下に構えたまま接近し、逆袈裟に切り上げる。

「ッー、研ぎ澄ませ、蒸気霧ー！」

眼の前に立つ偽物はナイフ型の固有霊装を展開し、防ぐ。止められた以上、次に移るしかない。固有霊装としてはサイズの大きい不知火は、重い。重力だってかかるし、なにより上からの抑えられていては、その重さはいつもの比ではない。

「……ならー！」

不知火を引き戻すことで、ナイフによる制約を無くす。急に重量がなくなったことで偽物は体勢を崩した。それを見逃さず、左足で頭を狙う。

「ぐっ!？」

それでも、防がれる。左足を戻した勢いを利用し、今度は半回転しながら不知火を横殴り気味に振る。

「!？」

しかし、それすらもナイフで防がれてしまう。

「那澄ー!どうして、話を聞いてくれない!?俺はただ、那澄の無事を!」

偽物が、何か叫んでいるがそんな事は、知らない。でも、何故だろう。偽物なのに、お父さんに変装した悪いやつなのに、名前を呼ばれると、心が温かくなる。

「騙されないで、そんなやつ言うことなんて聞く必要はない。俺はいつだって君と一緒にいる。でも目の前のやつはそれを邪魔しようとしている。だから俺たちの安全を脅かす存在は消さなきゃ」

お父さんの言葉が、温かくなった心を冷やしていく。まるで余計な熱を持つなど、そう言われているかのような。そうだ、私にはお父さんがいてくれれば、他には何も要らない。

「誰なんだお前はっ!?そっくりな見た目しやがって。答えろ、那澄をこんな風にしたのはお前なんだろうっ!？」

「誰だと言われても、俺は空戸春澄だよ」

「ふざけんな!？」

「至って真面目だよ?だってほら、見てご覧よ。同じ顔に一緒の服装」

「黙れよ!」

「やれやれ、喋れと言われたから伝えたのに、今度は黙れだつて? いやいや随分と自分勝手な輩がいたものだね。那澄、遠慮することはないよ。コイツは僕の姿に化けて君を騙そうとしているだけだ。悩む必要なんてないよ」

「……うん、お父さん」

不知火が余計に重くなつたように感じる。

「那澄!……くうつ!」

「それに、どっちが本物かなんて、それを決めるのは那澄だ。自分を否定する春澄と、全てを肯定してくれる春澄。どっちが那澄にとつての父親なのか……まあ今の状況を見れば明らかだけどね」

「違うつ!!俺は彼女に無事でいて欲しくて避難を……そうか、お前は!？」

「おっと、それ以上は彼女の為にならないんじゃないかな?それこの状況だつて元を辿れば全て、君の無駄な正義感が生み出した結果じゃないか」

「うるさいっ!那澄、聞こえてるんだろう返事をしてくれ!?!違うんだ、あの時日本に行かせようとしたのは……」

「ふふっ、まったく仕方ないなあ那澄は。いつの間にそんなに遊ぶのが上手くなつたんだい?いいよ、なら僕も一緒しよう。親子二人、協力して偽物を倒すんだ」

「……うん」

お父さんの声が、私の心に浸透していく。良かった、お父さんが協力してくれるって、だつたら張りきらなくちゃ、不知火を握る力に更に力が入るのを感じる。目の前で激昂しているこの人も馬鹿よね、お父さんに逆らつて、こんなに当たり散らして……でも、不思議だわ。偽物の声この人が、姿が、立ち振舞がひどく懐かしく思えるの。まるで凍りきつた私の心をゆっくりと溶かしていくかのようにさえ

感じるのはどうしてかしら。偽物なのに、この人の目を見ると安心するのは一体何故？

「貴様っ!!……そうだよ、お前の言う通りこうなったのは俺のせいだ。つまらない正義感で何もかも救おうと必死になって、その結果がこのザマだ。それでもアイツらがやってきたことはやっぱり間違ってる。人を道具のように扱って、使えなくなったなら最初から存在しなかったかのように振る舞う。何かにかけている俺にだってわかるんだ、あの光景はやはり許される事じゃないんだって」

「……ならどうして、私を拾ったの？」

この人に一体何があったのか知らないけど、知りたいとは思わないけど、この人がまるで自分を見ているみたい……そう思ったらこの口が勝手に動いていた。

「那澄、一体どうしたんだい？さつきまであんなにはしゃいでいたじゃないか。疲れちゃったのかな？相手の口車に乗せられて、手を止めて話を聞いてしまうなんてまるで別人のようだ」

その言葉に体がビクツと跳ねる。失望されるのは嫌。突っぱねられるのもイヤ。私が望む言葉をくれないお父さんも、いや。

「……っー」

「……那澄」

さつきまで軽かったはずの不知火が、やけに重く感じる。でもそんなことは知らない。私を悩ませるコイツは邪魔だ。私は再び鎌を振り上げる。

おやおや、思わぬ効果だね。たかが言葉一つにあんなにも動揺するなんて。まるで嫌われたくない、見放されたくない**と必死に立ち振る舞う**幼子のようだ。

つたく、それに比べて部下共コイツラときたら、足止めすら満足に果たせねえつてのかよ。あんなガキでも己の身一つ必死に従おうとするのに、武器も人数も揃ってるお前らが、一人残らず倒されるとか、使えなさ過ぎて吐き気がする。

しかもそのガキですら一瞬手が止まるとか、従うなら最後まで使い潰されてくれよ。処分すんのが面倒だろうが。

「《欲望彼方の先》！」

「……うん？」

背後にアイツが姿を現した。なんだ？アイツは今まさにあのガキと対峙しているはず………ああなんだソウブルアーツ伐刀絶技かよ。つたく面倒なモン使いやがって。

「このっ！」

「落ち着いて那澄、この程度どうってことはないよ。こっちは俺がなんとかしておくから慌てないで」

さっさとしろつてのに、まだ攻めきれないつてのかよ。早いとこ始末してくんねえと仕事終われねえだろうが。こっちは1秒でも早くお前らとサヨナラしたいんだつての。

『お前が暇してんなら、俺がいくらでも相手になつてやる。お前の目的が復讐だつてんなら、大人しく従つてやる。……だから、那澄を開放しろ』

「おいおい、別に俺が強制している訳じゃないさ。ただちよつとだけ手伝ってくれつてお願いしただけで、彼女は自分の意志でそれを行つてるんだ。それに、彼女が何を望んでいるのか、知つていながら突き放すお前の方が彼女の心を縛り付けているんじゃないのかな？」

『……!!』

「凶星だからって、そんなに焦るこたあないだろう？遅かれ早かれ、どうせわかることだ。だったらいつそのこと早いうちにバラした方がいいだろう？」

顔に迫る刃を躲しながら相手の動揺を誘う。時々目の前のやつが揺らめくということは苛ついていいるから……ではなく自身の魔力を制御することで形にしているからだろう。一人で

組織の関連施設を壊滅させる程の伐刀者だ。ブレイザー単純な魔力だからといって刃まで幻影ということはないだろう。

「……っ！」

その額目掛けて蹴りつけるも手応えはない。こつちから傷つけることは出来ないのかよ。

「こつちの攻撃は効かないのに、お前は一方的に攻められるってのか。……なんでもありかよ」

『君を生かして帰すつもりなんて、微塵もないよ。大人しく娘を開放してくれるって言うなら話は変わるけど』

「何バカなこと言ってるんだよ？あんなにも使い勝手のいいオモチャ、早々に手放すとかつまらない選択するはずないだろうが」

「……」

「ここまで言われても黙るか。ということとは、さっきの一撃は威嚇のつもりか。じゃあ、もう一步踏み込んでみるか。」

「だからお前も、そのつもりでアレを飼ってたんだらう？」

『……それ以上那澄をモノ扱いするってんなら、その口一生開けなくしてやる』

「それとも、飽きたら売っ払うつもりだったかな？だとしたら悪かったな邪魔をして。ああそうだなあ、なんだったら今から買い取ってやってもいいぞ？」

『……詫びの言葉すら値しないと、それすらも相応しくないと考えるほどに……消してやる』

怒りからか、憎しみからか目の前の幻影は2つに増えた。よしよし乗ってくれて嬉しいよ。怒りの沸点は人それぞれだが、それさえ把握

してしまえばなんてことはない。

ちらりと刃を交えている親子を覗くと、動きはない。2つの幻影も不規則にブレてきている。・・・潮時か。残念だ、せっかく使えそうなおもちゃが手に入ったと思ったのに。仕方ないな、どうせ使えないのなら親子諸共、仲良く消えてもらおう。まずは、本来の仕事を済ませるためにも、あそこで向き合っている親子に静かに近寄らないと、ね。

「那・・・澄っ!!」

迫る鎌を避け続ける事は出来るが、正直なところアイツの口車から那澄を開放しなければと焦ってしまう。

「私は、お父さんと一緒にいられるなら、他には何も要らない。ただそれだけで十分なのに。どうして邪魔をするの」

「那・・・澄っ!!」

迫る鎌を避け続ける事は出来るが、正直なところアイツの口車から那澄を開放しなければと焦ってしまう。

「私は、お父さんと一緒にいられるなら、他には何も要らない。ただそれだけで十分なのに。・・・どうして邪魔をするの」

「・・・!?!」

一緒にいられたら、そう思っていたのは俺だけじゃなかったのか。俺だって、本当はすつとそうしていたかった。でも・・・それだと那澄を巻き込んでしまうから。今だっつてこうして巻き込んでしまっ

ているから。だから、せめて那澄だけでも遠ざけようとしたのに。結果としてそれが那澄を傷つけていたなんて。

「……ごめん」

ありふれた言葉でしか言い表せなくてごめん。

気づいてあげられなくてごめん。

傷つけてしまつてごめん。

一人にしてしまつてごめん。

ずっと一緒にいてあげられなくて……ごめん。

「不器用で……ごめん」

あの時君を見つけたのは偶然だったけど、軽い気持ちで世話してしまつたけど、初めて「お父さん」と呼んでくれたのは嬉しかった。気づいてたんだ。最初はだんまりで、無愛想だったけど、戦い方を、この世界で生きていく術を教えるだけの関係だったけど、それでも心を開いてくれたのは君だった。文句を言いながらも「那澄」という名前を受け入れてくれて嬉しかったよ。何度も負かされようとも諦めずに立ち上がった姿に、何度「褒めてあげたい」と思ったことか。

出来ることならずっと一緒にいてあげたかったけど……俺がやったのはその真逆。君の安全を願うがあまり、結果として君を傷つけた。

「ずっと一緒にいてあげられなくて、ごめん」

届いていないかもしれないけど、君の心に響いていないかもしれないけど、届くまで何度でも伝えるから。

「……っ!?!」

口の端から血が溢れる。

当然か。アイツの前に出した幻影は攻撃こそ通らないけど、それは魔力で出来ているからだ。幻影を構成している魔力を創り出しているのも、制御しているのも自分だ。つまり「魔力自体」への衝撃やダメージは、魔力を通して繋がっている自分にも伝わる。早く仕留めようと数を増やしたのが裏目に出た。数を増やせばその分だけ制御も難しくなるし、ダメージだつて受けやすくなる。

それでも。

「血を吐く程度の傷なんて、那澄の苦しみに比べたらなんてことはない。それで那澄を救えるのなら安いもんだ。いくらでも吐いてやるよ」

父親として娘を救うためなら、どんな手段だって選んでやる。もう呼んでくれないかもしれないけどな、俺は何度でも足掻いてやるから。もう一度、笑ってくれよ。

「……ごめん」

偽物が突然、そう口にした。一体何に對しての謝罪なのか。顔も声もそっくりな偽物に言われても何とも思わないけど、お父さんに似ているからか、その言葉が胸に響いた気がした。

「不器用で……ごめん」

不知火の柄を握る両手が震える。

「ずっと一緒にいてあげられなくて、ごめん」

心が温かくなる。

色んな事を思い出す。

『お嬢ちゃんが何を期待してるか知らないが、俺は別に強くもなんともないぞ?』

それは初めて会った時のこと。口では嫌だと言いながらも初対面の私を受け入れてくれた。

『……うーん、那澄とか?』

それは私という存在に名前を与えてくれた時のこと。何度も唸つて、あーでもないこーでもないと考えた末に見つけてくれた私の名前。

『はい、落ち着いてねえ。さあさあ、痛い痛い飛んでいけー』
それはあなたが“娘成分”とか訳わかんない成分を補充しようと初めて頭を撫でてくれた時のこと。すぐに突っぱねちゃったけど本当は嬉しかった。もつとやって欲しかったけど恥ずかしくて言い出せなかった。

『まあこれでも父親なんでね、一応娘の心情も解るつもりさ。それに、かつて自分も通った道だ。焦る気持ちは痛いほどわかる』

それは初めて私の気持ちに共感してくれた時のこと。訓練の途中で負け続けて拗ねていた私を慰めようと言ってくれた言葉。あの時は素直になれなくて話を反らしたけど、それでも心が温かくなった。

『じゃあ、いつでもどうぞ』

それは顔も知らないあなたの妹に嫉妬した時のこと。私の知らないお父さんが、懐かしそうに笑うのが悔しくて、無理やり助言をせがんだ。

『那澄一人だけで、日本に行ってもらおう』

それは私の気持ちに気づいてくれなかった時のこと。裏切られたように感じた私は、思わず払い除けてしまったけどあなたの顔は真剣そのものだった。

『ずっと一緒にいてあげられなくて、ごめん』

それは空戸春澄の言葉。いつも聞いていた、私を安心させてくれるお父さんの声。偽物の筈なのに、私からお父さんを奪おうとした偽物の筈なのに。さつきまでのお父さんとは違って、凍りきった私の心を

溶かしてくれる。溶け切った末に姿を現したのは、会ってから絶えず見てきた、そして今も正面で必死に立っている父の顔だった。

流れるのは一筋の涙。

口からも溢れるのはいつもの一言。

たった一言で済むのに、それを口にするのが、とても苦しい。

「お父……さん」

「……おかえり、那澄」

血を吐くお父さんあなたは、いつもと同じ笑顔で迎えてくれる。

不知火を解除して抱きしめようとした瞬間。

ぞぶりと、父の腹部から何か貫かれた音が聞こえた。それと同時に不知火を通じて、確かな感触を感じた。そして気づく。不知火には父の手が、今まで私の心を凍らせてきた偽物の手が握られていることに。

「いぼっ!」

まるで時間の流れがゆっくりになったかのように、お父さんが地面に吸い込まれていく。

ドサリと、はつきりとした音が聞こえるのと同時に、すぐ背後で声が出た。

「あーらら、手元が狂っちゃった。本当は仲良く処理してあげようと思ったのにい」

まるで、遊んでた拍子に物を壊してしまった幼子のような、楽しげな声だった。

「……あ、ああ、あああ……ああああつ!」

「おっと、酷いなあ。手伝ってあげようと思ったのに。まったく君はいつも手間をかけさせてくれるね。……本当に苛つくばかりだよ」
不知火を振り回すも当たらない。避けられて、呆れられて、嘲笑割られて、

「まあ仕事は済んだからどうでもいいか。……あーばよ」
そして偽物は姿を消した。

「那・・・澄っ！」
足に力が入らない。身体を動かすと激しい痛みを襲われる。振り付ける雨が異様に冷たい。

「お父さんっ!?!」
那澄が慌てて抱き寄せてくれる。ポロポロと雨ではなく涙が降りかかる。

ああ、那澄泣くなよ。またいつも通りに笑ってくれよ。
でも無理だよな、だって彼女を泣かせたのは俺自身だから。彼女の意思を無視してまで遠ざけようとして、その結果、こんなことをさせてしまったんだ。

くそ、まったく俺らしくもない。普段だったら穏便に済ませようとしただろうに。怒らせないで済む方法もあっただろうに。

一体どうして・・・ああそうだったのか。

なんだ、こんなところにあっただのか。
家を出たあの瞬間から、幾度となく探し続けたソレが、こうも身近にあったことにすら気づけないだなんて。

ホント、どうしようもない人間だな俺は。

なにより、さっきのことは謝りたかったなあ。もつと素直に伝える

べきだったなあ。あの時言葉に出来ていたら君にこんなことをさせずにすんだのに。

「ごめんよ、本当は気づいてた。那澄と一緒にいられたらどれだけ幸せか、それを知っていたいながら遠ざけようとした。だって君を危険な目に遭わせたくなかったから」

深々と突き刺さった鎌は、那澄がどんなに力を込めようと抜けない。傷口から溢れ出す赤いソレを、止める術はない。

咳と共にソレが、口からも溢れ出す。

「ごめん・・・なさい」

頬に熱い滴が降ってくる。それと同時に那澄の口から謝罪の言葉が溢れる。

「変だな、俺が謝ってるのに那澄が泣くなんて」

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい」

尚も那澄の涙は止まらない。

本当に、どうしようもない人間だよ俺は。自分の探し物のためだけに、那澄を傷つけて、泣かせて・・・一生後悔させる程に追い詰めるなんて。彼女を一人にしまいと、必死に行動してその結果、結局彼女を孤独にしてしまう。相手の心を汲む事が、こんなにも単純で、奥深いものだったなんて。しかも、それを娘から教えてもらうだなんて。

「さあいつまでも泣いてないで、ほら立って？こんな人間の最期に付き合うのは時間の無駄だよ。だから・・・」

「無駄なんかじゃ・・・ない」

「思い出はいつまでも楽しいものだけ抱えていけば、その分だけ苦しめない。悲しい思い出は、いつか君を取り込んで過去に縛り付ける。前に進むためにも、こんな光景は記憶から消した方がいいよ。・・・でも、そうだなあ。将来、妹と会った時にでも『あの人、馬鹿なことばかり』なんて話をしながら笑ってくれたら嬉しいかな」

「でも、それじゃあ・・・お父さんが」

こんなことに巻き込まれたつてのに、那澄はまだ父と呼んでくれるのか。自分で提案したソレを見ることの出来ない自分うくてなしがこれでもかって位に憎い。

「たった一人の那澄娘を放つて、自分勝手に一人で消え去る人間への手向けなんて、それでも勿体ない位なんだよ。だから、ほら」

震える手で今一度、紙を一枚差し出す。泣き続ける那澄は今度こそ受け取ってくれた。

「ほら、後は立ち去るだけだよ。さあ立つて？今まさに君那澄が独り立ちする時だよ。こんな時にまで親に頼るようじゃ、まだまだ頭を撫でてあげないといけないお年頃なのかな？」

さつきまで感じた激痛が嘘のように消えている。代わりに感じるのは異様な寒さ。瞼が重くなり、焦点も合わなくなってきた。けれど、今尚座つて抱きかかえてくれる那澄が立ち上がるまでは起きていないと。娘の自立する姿を心に刻まないで眠るなんて、そこまで落ちぶれたつもりはない。

何も持つていないその手を那澄の頭に置く。ポフツという感触が普段通り気持ちいい。優しく、撫でる。啜り泣く那澄を慰める為に、娘の自立を祝うように、別れの挨拶をするかのように。初めて出会つて、一緒に過ごすようになってから、よく感情を表すようにはなつたけど、寂しがりやなところはいつまで経つても変わらないね。

「大丈夫、直接血は繋がっていなくても、那澄は俺の自慢の娘だよ。どこに出したつて恥ずかしくない。照れ屋で、恥ずかしがりやで、素直になれなくて……でも、相手のために行動できる優しい子だ。君ならどんな障害だつて乗り越えていけるって信じてるよ。ただ残念なのはそんな君を、妹と笑い合う君を見られない事だけだね」

最期にもう一度抱きしめた事でやっと決心がついたのか、那澄は涙を拭い静かに立ち上がる。……うん、やっぱり那澄に涙は似合わないね。

「うん……うん。私、乗り越えるから。どんな障害だつて乗り越えて、笑つて吹き飛ばして見せる。それで、またお父さんに会った時にも思い出話として楽しんでもらうから。今までありがとう……」

また、ね」

那澄がやつと、自分の足で歩き出した。それが少し寂しいけどきつと那澄の為を思えば最善だから、送り出すよ。

またいつか、会えるといいね。

那澄の姿が見えなくなつたから、もういい……よね。

不思議なこともあるもんだ。雨は今も降り続けてるし雲は厚いまま。だけど目を閉じるとそこには何処までも澄んだ青空の下で、俺と妹と共に心の底から楽しそうに笑う君の顔が見えるんだ。……君の笑顔がいつまでも続く事を願ってるよ。

つまんねえ、ムカつく奴らをまとめて消したつてのに、苛つきが収まらねえ。収まるどころか増してやがるし、最期の瞬間まで笑顔とかホントに苛つかせやがる。

「おい、教えてくれよ。なんでそんなに満足して逝けるつてんだ？嫌われて、娘を利用されて、止めを刺されて、泣かせて。そんなんで、どうしてテメエは笑つてんだよ」

せめて最後に散々人のことを苛つかせてくれた札に戻ってきてみれば、満足そうに笑つてやがる。いくら聞いても、ソレはもう口を開かない。目を開かない。一切の反応がない。

「最後の最後までわからない奴だったな。……まあわかりたいとも思わねえけどよ。せつかくだ、テメエの面と名前、俺がもらつてやるよ。どうせテメエにはもう用なしのモンだ。構わねえよな？」

空戸春澄コイッとして生きていけば、今はわからない謎も解消出来るんだろうか。

手を翳せば自分の顔が、体がソレと全く同じものになる。これで俺は空戸春澄という役割を手に入れた。それでも、まだ足りない。だけど慌てることはない。もう一度あの娘に、空戸紗奈に会えば解るだろう。まあ今は組織に戻って報告を済ませた後に休暇を得る訳だからそれも当分はお預けか。……ああ楽しみだよ那澄、もう一度君に父親として会えるのが。その時君はどんな表情気持ちで接してくれるんだろうね。

過酷な現実が牙を剥く

「ふあゝ．．．ん？」

目を覚ますといつものベットだった。おかしいな、確か帰宅した後は部屋に入ってすぐに寝た記憶があるんだけど、でも今はベットにいる。ということ．．．

「無意識にベットに移動したってことなのね！もう、私ったら流石なんだから!!」

「な訳ないでしょっ！私が運んであげたのよ!」

ベットの横からここ最近よく聞く声が耳に響く。

．．．違つたのか。いやまあ解つてはいたけど、いざそうなるとなんかこう、虚しくなるね。

「さんねくん．．．おはよ」

「ハイハイおはよ．．．じゃないわよ！散々人を振り回しておいて、呑気に寝るとか、どういう性格してんの!」

ベッドから出て伸びしていると叔母さん、もとい紗奈お姉ちゃんが近寄ってくる。

「こういう性格ですけど?」

「ドヤ顔で言う内容じゃないでしょっ!」

パシツと快音が響くと同時に頭が痛くなる。なんてことだ、この叔母、突っ込みにキレが増しているだも!?

「反省しないで失礼なこと考えてるようなら．．．おかわり入れてあげようかしら?」

「．．．．．!」

ブンブンと首を何度も横に振る。顔はにこやかだけど、有無を言わさぬ雰囲気を出している。この叔母、手強い!．．．でも、ここで負けるわけには．．．

「．．．っ!!まだ何も言っていないのに、なんでえ?」

再びパシツと音が響く。痛む頭を抑えて抗議する。

「声にしてないだけで、失礼なこと考えてたんでしょ、わかってるの

よ?」

「……ちつ」

「オイコラ今なんで舌打ちした。起こってないから教えてもらんなさいよ、ん?」

「……血は争えないんだなって」

「どういう意味かはよくわかんないけど、喧嘩売ってるのよねそれは。いいわよ、乗ってあげるわよその挑発」

「別に遊んでくれるのは嬉しいけど、一輝さんの試合間に合わなくなるけどいいの?」

「……は?」

「詳しくは時計をご覧下さい」

壁に掛けられている備え付けの時計を示してあげると紗奈お姉ちゃんの表情はどんどん青ざめていく。なんか百面相してて面白いから、もつと追い詰めてやろうかしら?」

時計の針は十四時を指し示している。確か一輝さんの試合が始まるのは十三時半、つまりは遅刻である。幸いなことに今日は紗奈の試合はないから別に観戦しなくても怒られはしないのだが、真面目な同居人は直接見ないと気が済まないようである。選抜戦期間中は授業は午前中のみで、午後からは夕方まで選抜戦が行われる。もちろん火曜日である今日も、その前日である昨日月曜日も例外ではなく、ちなみに紗奈は昨日も今日も午前中は授業、午後は観戦と活発なのだが対する那澄は昨日退院したばかりということで紗奈が理事長に許可を貰っているとかでお咎めは無しである（偉大なお姉様、マジ感謝!）

「急いだからいいと思うけど?」

「うっそ、アンタの悪戯じゃないのアレ!」

「確かにそう思われても仕方ないけど、でも私がやって得すると思うかしら?特に目的もなく悪戯するほど暇してないわよ私」

「た、確かにそれもそうね。わかったわ。じゃあ私行ってくるから!」

慌てながらも準備を済ませていく同居人を尻目に、再びベッドに戻ろうとする。

「あんたも後から来なさいよ！」

「……ハイハイ、行つてら〜」

ガチャリと扉が閉まり、この空間には自分一人だけしかない状況になる。

「さ〜とと」

そして同居人が完全に離れたのを確認し扉の鍵を閉め、ベッドに戻る前に先程示した時計へと向かい壁から外す。

そして慣れた手付きで時計の裏側から針を動かす、指し示されている時間を元に戻す。

「アナログっていいよね〜。楽に操作できるし簡単に騙せたり出来るし、でもってバレたとしても偶然とかうっかりとかで誤魔化せるしい〜」

そう、実は那澄、以前紗奈がシチューを食べて気絶眠つたした際にこつそり与时計の針を弄っていたのである。

一体何故かつて？

その答えは至極単純。

「この世に二度寝ほど幸せなものなんて存在しないってお父さんも言つてたものね〜。最初は反対だったけど、今じゃ大賛成よねえ」
なんてことのない睡眠欲親の教育方針であった。

時計の針を十三時正しい時間に戻して、ベッドに戻る那澄は数分も経過しないうちに寢息を立てる。観戦しに行く気がないのは明白であった。

「はっ……はっ……ふう、到着つと！」

一輝さんの試合が行われる第四訓練場は寮からそれほど離れていないとはいえ、開始時刻を過ぎているとあっては観戦席も空いていないだろうが、それでも急いでしまう。最悪、立って観戦することになるだろうがそれも仕方ない、諦めるほかないだろう。

しかし、そこで違和感に気づいた。そう、歓声が聞こえないある。昨日行われたステラ・ヴァーミリオン戦と黒鉄珠零戦、どちらも物凄く盛り上がっていた。今年度の主席と次席なのだから注目されるのも当然だろう。

そして、本人には申し訳ないが、色んな意味で注目されている黒鉄一輝さんも相応に注目されているのだが。

「静かなのね……あ」

そう、騒がしくないのである。昨日の二人は開始前から騒がれていたから一輝さんもそうなのかと思っていたのだが、違うのか。そして中に入ろうとした矢先、受付に向かおうとしている一輝を見つける。

「一輝さーん！」

「……やあ紗奈さん、どうしたの？」

「いや、〝どうしたの〝はこっちのセリフですよ！だってもう開始時間過ぎてるじゃないですか！なんでまだ準備してないんですか!？」

「なんでって……」

まるで何を言われているのか解らないと言わんばかりの表情で答える一輝と急かす紗奈。先に動いたのは一輝だった。

「まだ二十分も余裕があるんだけど」

「……ふえ？」

そう言つて一輝は訓練場の前に建てられている柱時計を指差した。紗奈はそれを目で追うまま時計を見る。そして状況を理解したのか、その表情は驚愕から憤怒へと変化した。

「……アイツ！」

「あはは、でも嬉しいよ。理由が何であれ、試合前に友人に会えて緊

張も解れたからね」

そして何かを察したのか苦笑いをしながら一輝は口を開いた。

「一輝さんも緊張……するんですか？」

「もちろん！だって僕にとつては久しぶりのチャンスのチャンスなんだから。必ず勝つから見ててよ！じゃあそろそろ行くね！」

そして一輝さんは訓練場へと入っていった。

「………？」

でも何か引つかかる。だってさっきのは、昨日まで見てきた表情とは何かが違う気がした。何がとは言えないけど、でも違ってたんだ。いくら考えても思いつかないから諦めて観客席に向おうと向きを変えると再び時計が目に入る。

（確かにそう思われても仕方ないけど、でも私がやって得すると思うかしら？特に目的もなく悪戯するほど暇してないわよ私）

「………つとに、どの口が言ってるのよ！」

「どうかしたんですか、紗奈さん？」

愚痴りながら歩いていると後ろから声をかけられる。振り向くと黒鉄珠雫と有栖院凧が揃っていた。

「………あつ、黒鉄さんと有栖院さんじゃないの。二人も応援しに来たの？」

「当然じゃないですか。私がお兄様の応援をしないなんて天地がひっくり返っても有り得ないですよ」

「………そうよお、せっかく一輝の勇姿を目にする機会だもの、直接見ないと勿体ないわ。アナタもでしょう？もし良かったら一緒にしない？」

「え、でも……」

「別に私としても断る理由はないですし、お兄様を応援して下さいと言うなら大歓迎ですよ」

「………ね！」

迷惑ではないか、そう思って断ろうと思ったがどうやら杞憂の様だ。

「じゃあ、お言葉に甘えてよろしくね黒鉄さん、有栖院さん」

「んもう、アリスって呼んで頂戴！さん付けなんてくすぐったいわ！」

「私も珠雫でいいですよ。名字だとお兄様と混ざりますから」

「わかったわ、なら私のことも紗奈でいいわ。そうしてもらえると那澄と混ざらないでしようから」

「うふ、いいわねこういうの。女子会！って感じで」

「……女子会？いや、うん。まあ……触れちゃいけないわよね。」

アリスの発言に多少の引っかけかりを覚えつつも、そのまま言い出すような野暮なことはしない。

「それで、その『那澄さん』はどうしたんですか？まさかお兄様の試合を見ないつもりなんですか？」

その一言が色々と思いつきさせた。

「本人は来るつもりみたいよ、一応」

「ではなぜまだ来ていないんですか？確かに倒れたとは聞いていますが、ひよつとして思っていた以上に重症なんですか？」

「えっと……ね」

一緒にしたばかりで申し訳ないが、愚痴を聞いてもらわなければ理性を保てないかもしれない。いつそのこと、一度説教駆除を依頼しなければいけないかもしれない。そう思いながら歩きながら事情を説明する紗奈であった。

「……………ふわあ」

父の教え通り二度寝を達成した那澄の顔色は良好であった。悪戯が成功したこともあって、普段よりも若干ハイテンション気味なのは言うまでもない。

時計の針は十三時半を過ぎている。一輝の試合はとつくに始まっているのだが、それを気にする那澄ではない。慌てる素振りなど微塵も感じさせない、ゆつくりとした動きでベッドから出て着替えなどの準備を済ませる。

行かなくてもいいか、そう考えていると同居人に言われた言葉を思い出す。

(あんたも後から来なさいよ！)

「悪戯しておいて行きませんでした……………は怒られるわよね流石に」

あとあとキツ目に怒られるのと、今から向かって少しお小言もらう程度で済ませる。普段から気怠げな那澄がどちらを選ぶのか、答えはとつくに決まっている。

「……………うわ、眩しっ」

時間帯は既に昼過ぎだが、彼女にとっては関係ない。目を覚ますと、時間帯を問わずその瞬間こそが那澄にとっては朝なのである。

扉を開けて太陽の光を手で遮りながら外に出る。観戦怒られししに行く彼女はやはりいつも通り気怠げなのであった。

「……………何、これ」

訓練場の観客席、その端っこに着いた途端、そこは異常だった。森に囲まれ不可視の矢に嬲られ続ける一輝さんと、それを心配する素振りを見せず寧ろ嘲笑い指差す生徒たち。その光景は間違いない地獄だった。

『Fランク風情が七星剣王になったら卒業!?有り得ねえだろうがっ！』

『この前のAランクとの試合だって八百長だって話だろ！親が偉いと楽出来ていいよなあ!?!』

『そうだそうだ、身の程を知れっつんだよ!!』

不可視の矢のみならず全方向からの罵声にも曝される。いくら私でもその心境を押し量れない程、間抜けになったつもりはない。根拠のない空想にも関わらず、なぜ生徒たちは信じるのか。その理由は容易に想像出来る。

その空想が彼らにとつて心地よいから。

学生騎士の大半を占めているランクはEとD。彼らは自分よりも遙かな高みに存在する『天才』という人種を日々見上げ続けている。そんな彼らにしてみればFランク騎士は数少ない格下。天才と呼ばれる存在よりも、自分よりも下の存在を蔑むことで自身の優位を保とうとしている。言い換えるならそれは、Fランク格下がAランク天才に勝ってしまうば努力していない自分諦めていることを認めてしまうから。

だからこそそんな者挑戦するを否定する。周りも同調するからこそ止まることも、止められることもないから。届かない高みを目指すよりも、すぐに浸れる優越感の方が諦めている自分を見なくて済むから。

『もういい加減、現実を受け入れなっつて黒鉄君。雑魚はどんなに上を目指そうとしたところで雑魚のまま。生まれ持った『格』を変えることなんて出来やしないのさ!』

『見苦しい!』

『引っ込め七光り!』

『落ちこぼれが!』

恐らく周りを扇動したであろう対戦相手が、尚も姿を見せぬまま一輝さんの精神を蝕んでいく。

「だまれええええええええええ!!」

一輝さんを責め立てる罵声を、嘲笑を、蔑視を止めたのは《紅蓮の皇女》の叫び声。火炎の燐光を散らすその姿は、不可視の刃である侮蔑を止めるに十分すぎるほどの威力を秘めていた。

アナタの探してるもの

その叫びが周囲の注目を集めるが、それでも《紅蓮の皇女》は止まらない。

「自分たちが勝手に決めつけた格付けを、梓を一方的に押し付けて自分たちが諦めている事を認めない。勝手に諦めるだけならまだ構わないわよ。だけどそれを理由に、自分が諦めたことを押し付けて上を目指しているアタシの大好きな騎士をバカにするなアツツ!!」

「言っただじやないツ。他人に何を言われても、諦めないって！そんなイツキとならどこまでも上を目指していけるって思ったのよ！だったらこんな奴らに言われたくらいで、そんな、諦めたような顔するんじゃないわよッ！アタシに勝ったのは、アタシが憧れたのは、……アタシが好きになったのは、いつだって 上を向いて、自身を誇り続ける黒鉄一輝という騎士なんだから！……だからッ、アタシの前ではずっと格好いいアンタのままでないさいよこのバカアアツ!!」

遠目にだけど解る。《紅蓮の皇女》の叫びが、今まで俯いていた一輝さんを救ったと。

だって、そうでもなければと一輝さんが自分のこぶしで自分の顔を、音が響く程に強く殴りつけたりなんてしないから。

「ありがとう。ステラ。……いい活が入った」

そして一輝さんは再び自分の固有^{デバイス}靈装を握り直していた。

それから先は一方的だった。伐刀^{一刀修羅}絶技を発動した一輝さんが《狩人》ひたすらに追い詰める。

《森》に囲まれた状況でどこから矢が飛んでくるかなんて解らない筈なのに、受け止めていた。

「剣術を盗むってのは真似るだけじゃなく、型や太刀筋から積み重ねられた歴史を紐解き、そこに至る思想をくみ取り根幹に座す“理”を暴き返すということ。つまり人間性そのものを盗んだ」

そう西京先生は言っていた。普通は無理だ。やれと言われたところで大抵は不可能だと答える。でも、一輝さんは肯定した。

「別に姿が見えなくても、桐原君がどこにいるかなんて足跡を辿れば難しいことじゃない。傷を受けた順番は手順を、角度は方角を、威力は距離を教えてくれる。だから後はいつも通り。構造を、行動を、趣向を辿り理解すれば……ありとあらゆる行動全てが手に取るようにわかる」

「くるなああああああッ!!」

悩んでいる間も試合は続く。

《狩人》が百の鏃による無差別範囲攻撃を放つも、全てを知っている一輝さんには当たらない。

「止まれ止まれ止まれ止まれ! 止まれているがきこえねえのかよおおおお!? ふざけんなこのボクがFランク風情に負けられるか! お前みたいなクズと違って僕は期待されてんだ!」

《狩人》がどんなに叫ぼうとも一輝さんは止まらない。少しずつ確実に距離を詰めていく。

「な、なあ! もうやめよう! そんな刃物で人を斬ったら大変だろっ!? イヤだイヤだイヤだ! そ、そうだジャンケンで決めよう!! 友達じゃないかッ!!」

「……………」

「わかった、わかったから! 負け! ボクの負けでいいから痛いのは

いやだあああああああああああああ!!」

衝撃音と共に煙が広がりにリングを覆い尽くす。煙が晴れると、

《狩人》は鼻の頭から一筋の血を流し、ゆっくりと倒れた。

『桐原静矢、戦闘不能！勝者、黒鉄一輝!!』

レフリーが一輝さんの勝利を宣言した。

観戦している生徒がざわついていいる中、私は静かに訓練場を離れ帰宅しようとして歩いていった。

「……………」

私は……………空戸那澄は、その言葉が、黒鉄一輝という人間を恐ろしく感じた。別に《狩人》に同情した訳ではない。ただ、黒鉄一輝という一騎士の戦い方が、私にそう感じさせた。だってさっきの戦いで彼が暴いたのは、人間の『絶対価値観』アイデンティティそのものだから。相対する人間にとってはまるで操られているかのように思えるだろうから。状況が、環境がまったく異なるとはいえ、いつかの自分を思い出してしまう。比べてはいけない事は解ってる。気の所為だと思えたら良かったのに、それでも思い出してしまったのは、ついこの前に会ってしまったからなのだろうか。

わからない。一輝さんの戦い方が間違っているとは思わない。だって努力の結果だから。彼がそこに至った理由など知らない私が否定出来る内容ではない。だけど、何も持っていなかった私には空戸春澄こそが父であり師であった。プレイヤー伐刀者としての生き方を、戦い方を、人としての生き方を示してくれた私の全てだった。仮に対峙した場合、そんなお父さんとの思い出全てを掌握されてしまうのかと思う

と恐ろしい。初めて得た唯一の宝物。

「・・・・・・・・・・はあ」

どうして観ようと思ったんだろう。あの時、『偶には同居人の言葉に従おうかな』なんて思わなければ、こんなことを考える必要なかったのに。

「・・・・・・・・・・最悪」

いつそのこと、このまま帰らずに出歩いてしまおうか。いやでもそれだと、あの世話焼きの同居人が探しに来るに決まっている。そうなったら理由を求められるだろう。なら面倒は避けて、帰宅しよう。

「・・・・・・・・・・」

最近慣れてきた道を歩く。特に変わった景色ではないけど、それでもこれを見るのはお父さんのお陰。あの日私を送り出してくれなかったら、私は今ここにはいなかった。せめて礼を言いたかった。隣で歩いて欲しかった。一緒に付いてきて欲しかった。もし、私があの日素直に従っていたら、頼まなければ、会わなければそんなこともならなかったかもしれない。

渡された紙に従って、一番上に書かれていた場所に向かった。そこで会った人は空戸春澄に救われたことがあると言っていた。その恩に報いる為に移動に協力してくれた。

（ん、どうした嬢ちゃん？ここは嬢ちゃんみたいなのが一人で来ていいような場所じゃないぞ？・・・・・・・・・・探してる人がいるけど名前がわからない？その持つてる紙に書いてあんじやないのか？読み方がわかんない？仕方ないな手伝ってやるから見せてみな。なんだ、俺のことだったのか。しかしなんで俺を・・・・・・・・ってそうかあいつ絡みか。話はわかった、ついてきな）

次に着いたところで空戸春澄に手伝ってもらったことがあると

言っていた。その礼として国を渡る手続きをしてくれた。

（おつ、ちよつとアンタ落とし物だぞ？礼なんかいいのに丁寧だな。人を探してる？紙に書いてある？ああ、それは俺のことだ！この紙に書いてある名前、また懐かしい名前だな。いいぞ、滅多にないあいつの頼みだ引き受けた！）

国を渡った先で会った人は衣食住、身の安全を保障してくれた。なにやら空戸春澄という男に雑に扱われたことがあるらしいが結果的に助けられ、恩を返す為に匿ってくれた。

（え、キミ迷子なの？・・・まあここ入り組んでるし当たり前か。出口ならこの道真つ直ぐだから早めに行った方がいいよ。ここ、暗くなる物騒だから。・・・違うの？行きたい場所がある？なんだウチじゃん。でもなんでキミが探してるの？良かったらその紙見せてくれない？・・・なんだ、そういうこと。相変わらず人を振り回すのが得意なんだな。ああゴメン違う違う、別にキミがどうしようじゃないから。ちよつとこれを書いたやつと色々あつてね。いいよちよつと複雑な気持ちだけどキミを匿ってあげる）

そうして空戸春澄という男に関わったことのある人達に協力してもらい、それらを繰り返すうちにこの学園へと入学していた。

不思議なのは、お世話になった人達全員が、空戸春澄に感謝していたことだ。印象や思い出を語ってもらえば無愛想だとか、薄情だとか、冷血だとかそんなことばかりだったのに、最後には皆同じ事を楽しそうに教えてくれて、悲しんでいた。

（変な父親だっただろう？自由というか子供っぽいというか。今はどうしてる？・・・なんていうか最期まで自由なんだな、やっぱり。結局探しものは見つかったのか？そうかい。ならさぞや満足気だっただろう。・・・ずつと人を振り回してばっかりで、しようがない奴だな）

思い出しながらも体は動く。学生寮へと到着し階段を上がり廊下を進み鍵を差し込み扉を開ける。元々荷物を持っていなかったこ

ともあり、特に動くわけでもないから着替えを済ませ向かったベッドで横になる。

紙に書かれていたのは人や地名だったけど、それでも全てに行けた訳ではない。唯一行けなかった場所、それは空戸春澄の実家だった。(まあ、遅かれ早かれ学園関係で会うだろうとは思ってけど、こんなに早く機会が訪れるなんて思ってたわ。しかもクラスどころか部屋まで一緒になるとか、お父さんなら大笑いするでしょうね)

空戸春澄とは何もかもが違う同居人だけど、唯一共通しているのは、笑ったときの雰囲気。自分だけでなく、相手の心も穏やかにしてしまうアレだけは同じだった。二人のソレが同じだけに、僅かに嫉妬してしまう。まるで自分だけ置いていかれたかのような焦燥感に襲われる。解ってる、それは表に出してはいけないのだと。だからあまり接触しないように、行動してというのに。こっちの気持ちを知らない同居人が向こうから寄ってくるのだから困ったものだ。

(そこも似てるなんて、嫌になるわね)

気付いてほしくないのに、何もかも理解したように踏み込んできて。頼んでないのに、勝手に解決しちゃって。

ガチャリと扉の開く音と共にバタバタと足音が聞こえてくる。

「ちよつと那澄、あなた結局来なかったじゃない！しかもあなた時計の針イジってたわね、そのせいで恥ずかしい思いしちゃったじゃない！ねえ聞いているの!？」

ああほら、また勝手に踏み込んで来る。せっかく人が関わらないでいようと思っていたのに、それを邪魔してくる。

「ちゃんと行きましたあ。後は時計の針とか心当たりないんですけど。私が動かしたなんて証拠でもあるの?」

「そのセリフが何よりの証拠でしょう!」

ああほら騒がしくなった。その雰囲気がお父さんを思い出させる。まるで今も身近にいるかのように錯覚させる。タイミングが悪かったな、だってこのモヤモヤがなんなのか、もうお父さんに聞けないじゃない。

痛い思いと引き換えに

「……………何よ、眠いんだけど」

目の前が急に明るくなる。今の今まで自分を優しく包み込んでいた毛布が剥ぎ取られ、装備を失った体に心地良い風と眩しい日光当たり、ベッドで横になっていている自分を嫌そうに見下ろす同居人が絶えず圧を発している。

「今日の予定、覚えてるわよね？」

「あくはいはい覚えてる覚えてる。じゃおやすみ」

素早く毛布を取り返し、日光と視線を遮るように頭を覆う。嗚呼、なんて素晴らしいの暗闇。やっぱり私を癒やしてくれるのはアナタだけよ。涼しい風、心地良い暗闇、そして程良い眠気、こんなにもベストコンディションなのに寝ないなんて勿体ない。

「あつ、ちよつと起きなさいよ！なんでこんな時に限って素早いので！まずは毛布を手放しなさい!?!」

「こんな状況で睡眠を満喫しないとか……………人生損してるよね」

「アンタの価値観で私の人生決めてんじやないわよ!?!勝手に人の損得決めつけるとか、アンタいつからそこまで偉くなったのよ!?!そういう文句はせめて直接目を見て言いなさいよ!」

「……………くう」

「だから寝るな!」

「……………くうゆ……………しゃい」

「寝ながら返事しないの!うるさいって何よなんで私が……………」

「面倒くさいからって黙るんじやないわよっ!」

「じゃあ何よ。言っておきますけど人の睡眠妨げるほどの重要事項なんでしようね?じやないと許さないからね」

「へえ〜大きく出たものねえ」

「……………何よ、さっさと教えなさいよ。変に勿体ぶるなら聞かないから」

「二輝さん主催で訓練するんですって……………室内プールで」

頭まで覆うつもりでいた毛布が止まる。室内プール、プールだけでも縁がないのに室内プール。今までにも行ってみたいと思うことはあっても、実際に行けたことはない。だから行きたいところだ……が、二度寝を諦めたくない。

「う……いやでも、うあゝ」

「ちなみに二度寝はいつでも可能だけど、プール練は今回だけみたいよ。あと時間も押してるから決めるなら早くしてよね」

「………決めた」

ええ決めたわよ。この私にしては珍しくばっさり決めてやったわよ。この潔さに恐れ慄くがいいわ。ふっふっふ、同居人の尊敬の眼差しが拝めると思うと頬が緩んで仕方ないわね！（毛布を頭から被ってるから見えないだけね）

「聞かせてもらおうじゃない」

「二度寝してるからその間におんぶで運んでおいて」

「いい加減にしないー」

ばっ！、と勢いよく毛布が剥ぎ取られ、眩しいと呻くより先に頭部に物凄い衝撃が走った。その結果、睡眠とは別の意味で目の前が真っ暗になった。

寮を出て集合場所に向かうと既に全員集まっていた。

「ごめん、遅れたわ」

「まだ時間になってないから大丈夫だよ。寧ろ皆が早すぎるくらいだからね、ゆっくり向かってても間に合うよ」

ああ、一輝さんがどこまでも優しく逆に応えなくて逆になんか悪くなってるわ。

「那澄さんは・・・聞かない方がいいよね」

「・・・そうしてくれると助かるわ」

「別に引きずっても構わないではないですか。いずれお兄様の悩みの原因となるのなら、多少痛い目に遭って今から反省して貰わなければ私の気が済みません」

珠雫が汚いものを見るような目で那澄を見つめている。まあ私も少なからず同じ気持ちではあるけど、今それを言い出したら、より時間を押してしまうだろう。今は何も言うまい。ただ、少しばかり雑に運んでも許される気もする。

実は自分から申し出た。というのも少しでも強くなれるならと、あと那澄の怠け癖を鍛え直すそうとか思ったり思ってたなかったりするけど、まあそれは置いといて。

「まあとにかく、皆集まったことだし行こうか」

幸いなことに、一輝さんも深くは気にしないできてくれるからこのままにしておこう。

「う、うん……は」

「やっつと起きたのね！あまりにも反応ないから少しばかり不安だったけど、まあなんにしても手間が省けて良かったわ。今朝も言っただけどここは一輝さんたちが訓練のために借りたプールよ。ほら納得したらこれに着替えなさい」

買ったことを覚えてはいても、どうせ準備してないだろうと思つて、事前に用意しておいて良かった。案の定、状況を把握できてない様子だから急がせる。

「……これは？」

「前に買つておいたでしょう？勝手に悪いとは思つたけど、持ってきたの。あなた、準備してないだろうと思つたから」

どうせ文句でも言うつもりなのだろう。渡した水着を数秒間見つめた後、顔を上げて真っ直ぐ視線を合わせてきた。

一体何を言われるんだろうかと身構えていると……

「まあお姉様、感謝いたしますわ！」

「……」

あまりのことにそのまま固まってしまった。

「どうかされたのですか？」

「……い、いえ」

「はっ、私としたことが謝罪からするべきでしたわ!?!。申し訳ありませんお姉様！処罰は如何様にも！」

これは一体どういうことなのだろう。普段の那澄からは想像出来ないことが溢れていた。あ的那澄が開口一番に感謝の言葉を口にするなんて。それに、面と向かつて謝罪をするなんて！何よりその言葉遣い何処から引つ張り出してきた!?!

「お姉……様？」

「な、なんでもないわよウン！そうそれに着替えて上からそのシャツを着ればいいからね！じゃあ私は先に行くから、ちゃんと来るのよ!?!」

慣れない呼ばれ方に背中がムズムズする。必死に堪えながら、それをバレないように慌てて答える。

急いで水着に着替えて、その上から渡したのと同じ無地のシャツを着て更衣室を出る。

まさかのドッキリという可能性もなくはないが、私の知ってる那澄ならもつと色々と仕掛けてくるだろうから今回は違うだろう。なら一体何が原因でこうなってしまったのか……。いや思い当たる節があるといえはあるが、そんな都合のよい展開など認めれない。とにかく、急いで一輝さんたちに伝えないと！

更衣室を出て真っ先に会ったのはステラだった。今は誰かに伝えなければと焦っていたから特に気にしなかった。

「あれ、早いよね。那澄はもう起きたの？」

「え、ええそうなの……。じゃなくて！いやでもその通りなんだけど、今はそれどころじゃなくて!?!」

「……。何がどうしたのかわからないけど、取り敢えず落ち着きなさい。それと、そんなに慌てなくても私は逃げないからゆっくり話してくれると助かるわ」

「う、うん。わかったわ！」

確かにその通りだ。焦っているのは伝えたいものも正確に伝えられない。息を整えるために深呼吸を数回繰り返す。

「……。はあ。ありがとう、落ち着いたわ」

「別に、感謝されるほどのことじゃないから気にしないでいいわ。

それで、さっきは何を言いかけたのかしら?」

「そうね、今なら正しく伝えられるはずよ。ええ決して取り乱してはいけないの。もちろん、相手を動揺させないように配慮しながらよ。」

「内容を聞いたら混乱するかもだけど、出来るだけ取り乱さないでね。実は……」

「お待たせしましたわ、お姉様!」

やはり聞き慣れない言葉遣いを口にしながら駆け寄ってくる那澄が視界に入った途端、諦めてしまった。

「……間に合わなかった」

「?」

もう遅い。状況を理解してもらい、身構えてもらおうとしたが全てが遅かった。もう、どうしようもない。

「あら那澄、思ったより体調良さそうね」

「あらステラ様、ご機嫌よう!ふふっ、その水着よく似合っておりますわね!」

「……は?」

今までの那澄を見た人なら、普通はそうなるわよね。同じ部屋で生活してる私でさえ未だに理解できていないのだから、ステラの反応も頷ける。

「本日は人数が多く忙しい中、私達の参加を認めてくださり感謝いたしますわ」

「な、何これ……ちょっと、沙奈に一体何が起きてるの?」

「私にもよくわからないの。今はまだ整理できてないから、後でまとめて伝えるわ。ごめんね」

「……取り敢えず、私は先に行って一輝たちに伝えてくるわね」

「……ええ。でもなるべくいつも通りでね。他にも人がいるから迷惑がかからないように」

「わかったわ」

ステラが一輝さんの方へ歩いていくと何やらざわついている。

「おおおおおおつ〜!」

見た途端、全てを理解した。そう、ステラの水着が原因だったのだ。

あのスタイルであの水着、加えてモデルさながらの歩き方が人の目を惹きつけている。

「おおおおおおおおおっ!」

再び何人かの男性の声が重なる。珠雫は愛くるしいスマイルにおとなし目な水着を着ていて、可愛らしさを引き立たせていた。

「おおおおおっ!」

次は日下部さんだった。正直あまり接点はないが、活発な雰囲気と周りを明るくする笑顔で周りを騒がせていた。

「あああああああっ!」

最後の歓声というか絶叫は・・・うんまあ、アリスの水着なんだけども言うまい。深く説明したらいけない気がする。どうして悲鳴が、とかそういうのは知らない方が身のためである。

「・・・じゃなくて!」

「お姉様、どうかなさいまして?」

「・・・大丈夫よ、なんともないから」

「でしたら安心しましたわ!」

「そういう那澄は体調悪いとかない?人混みで酔ったとか」

「まあっ!?お姉様が心配して下さるなんて嬉しいですわ!」

「・・・大丈夫なの?」

「問題ありませんわ!強いて言うなら、少しばかり頭がズキズキするくらいですわ。でもおかしいんですの。だって心当たりがないんですもの」

「・・・そう」

原因、絶対それよね。今朝の頭突きしか心当たりないわ。

「でも、それ以外にはなんともありませんから心配ありませんわ。ねえお姉様、早く行きましよう?」

頭突きの影響でお嬢様化した・・・なんて言ったら信じてくれるだろうか?いや、願うしかない。信じよう、それで納得してくれることを。

「おおおおおおおおおつ!?!」

一輝さんたちの元へ向かうと、再び周囲で歓声上がる。

私達は水着の上に薄いシャツと、ステラたちとはまた違った装い。流石に色までお揃いは嫌だと那澄が言うものだから、水着は異なる。いやまあ、正直那澄の水着姿に歓声上がるのは解るけど、なんで私まで？正直、私はそこまで水着に自信がある訳でもないのに、一体なぜ？……よそう、深く考えるのは後回しだ。今考えるべきは、一輝さんたちにどう説明するか、これに限る。

「お待たせして申し訳ありません、一輝様。悪いのは着替えに手間取った私です。お姉様は待っていて下さっただけなのです。ですからお姉様には怒らないで下さいませ!」

「えつと……その、これは?」

「……!」

一輝さんが目線で訴えてくる。そうよね、それが当然よね。でもお願い、後で絶対説明するから今だけは合わせて! 私も目線で必死に答える。お願い、伝わって!

「……一輝様?」

那澄には見えないように、コクコクと何度も頷く。

「……はっ、はい!?!いえ別に僕たちもそんなに待ってた訳じゃない」

いですから気にしないで下さい!？」

「本当……ですか？」

那澄が瞳を潤ませて確認している。すごい、本当に別人なのかもしれない。こんな反応、今までに一度も見たことないから、未だに同一人物なのか信じられないわ。

「……うん」

「ありがとうございます!お姉様、私珠雫さんたちと一緒にきてよろしいでしょうか!？」

「ええ、迷惑かけないようにね」

「勿論ですわ!」

嬉しそうに笑いながら歩いていく那澄を見ると、一輝さんが静かに聞いてきた。

「……一体何が起きたのか、聞いてもいい?」

「……あなたの理解が早くて、私としても非常に助かるわ」

さつきからずっとそのことを考えてた私が、それを断れるはずもない。これ以上、那澄による被害者を増やさないためにも、一刻も早く現状を知ってもらわないと。

「ちなみにどんな経緯でああったの?」

「あまりにも巫山戯たことを言い出すものだから、ちよつと物理的に。そのせいで私も頭がズキズキしてて」

「……うん?」

どうやらいい加減すぎて伝わらなかつたらしい。私も最初から理解されるなんて思っていなかつたから、もう一度、今度は簡単に説明する。

「ざっくり説明するなら、頭突きした。これに尽きるわ。というかこれしかないの」

「……頭突きであんなに変わるものなの?」

それは同感。なにしろ私でさえも現在進行系で把握できてないんだから。

「……ノーコメント。というか深く考えるだけ損すると思うの。」

一体誰の教育でああなつてしまったんでしょね」

「ああ……そうなんだ」

とはいえ、理解はしたが納得は出来ないのも事実。しかし那澄という存在を許容するにはそれしか方法がないというのが現実である。割り切るしかない、というやつだ。

幸いなことに、周囲には人が沢山いて、一輝さんが悩んでいても特に騒がれることはない。

「……ステラたちには僕から説明しておくけど、それでも納得はしてくれないと思う。特に珠雫辺りが詳しく聞いてくるだろうけど、そうなったら補足してくれる？」

「……本当に感謝してるわ」

それでも一輝さんがここまで接してくれるのは、彼が根っからの正直者であるが故だろう。心苦しいが、頼らせてもらおう。ステラたちの元へ向かうために足を動かすが、隣を歩く一輝さんの表情はやはり暗くなっていた。

せめてもの仕返しに

一輝達が訓練しているのを遠目に眺めながら、隣りにいる那澄をこっそり見る。

一見大人し目な雰囲気でありながらも、己を貫こうとする意思を感じる瞳。性格はともかくとしても、外見でなら人目を引くのも頷ける。

「どうかさいまして、お姉様？そんなに見つめられると私、照れてしまいますわ」

「……ごめんなさい、あまりにも楽しそうだったから」

「そういうことでしたの。ええそうですわね、私とっても楽しいですわ。なにせ、こういう施設に来ること自体が始めてでしたので、自分でも驚く程楽しんでいますわ！」

「……そう、良かったわ」

那澄の言葉に、思わず戸惑ってしまった。そして思ってしまった。今まで、この子はどうやって生きてきたのだろうか、と。

「ねえ、聞かせて？学園に来るまで間、アナタはどうしていたの？」すると、今まで楽しそうにしていた表情が微かに曇った。

「それは……残念ながら、お答えできません。今お伝えしてしまっただけは雰囲気壊してしまいますもの。楽しい時間には、やはり楽しい記憶が相応しいですから」

「……そう」

「ですが……きつといつか、お伝えすることを約束しますわ。ですから、それまで待っていて下さいな」

無理矢理聞き出したところでお互いの為にはならないだろう。

「私、ちよつと泳いでくるわね」

「はー」

那澄の表情はいつの間にか戻っていた。だけど、これ以上は何を聞いても曇らせてしまうかもしれないから、今はここまでしておかなければ。そう思って、私は泳ぎに向かう事にした。

「……………こんな記憶、誰に伝えても意味なんてないんですよ。どう伝えたところで過去は変わらない。だから人に伝えても無駄なだけなのよ、お姉様」

少しして、周りが騒がしくなってきた。人が増えてきたのだろう。昔からあまり混雑が好きじゃない私は、やや早足でその場を離れた。

泳いで少しすつきりした私は、那澄のいる方へと向かった。特に探さなくても見つけられたのは、すれ違う度にあの外見に反応した人が話していたから。

「こ、これは確かに衝撃ね。慌てるのも頷けるわ」

途中で顔を赤くしたステラと合流して一緒に向かうと、そこには思わず見惚れてしまう程の雰囲気纏った那澄がいた。隣のステラも、どうやら同じ感想らしい。

「……………ごめんなさい、待たせちゃったわね。一人でも大丈夫だった?」

思ったよりも時間をかけてしまった事に今更気づいて、那澄に駆け寄った。

「……………」

「那澄?」

疲れたのだろうか、何かを言っているにも関わらず、その声はさつきと比べてか細い。聞き取ろうと鼻と鼻が当たりそうな距離まで顔を寄せる。すると、那澄はこう口にした。

「……………遅いじゃない、叔母さん」

「っ!」

思わず距離をとって顔を見つめてしまった。だって静かに聞こえ

たその声は、口調はいつも耳にする小生意気なものだったのだから。

「どうかなさいまして、お姉様？」

「紗奈、どうしたの？」

隣でステラが不思議そうな顔をしているのを見る限り、今の声は自分にしか聞こえていないのだろう。しかし依然として那澄の表情は大人しいもので、プールに来たときと変わらず、周りを惹きつけるものだった。

「な、なんでもないわ。ほら那澄、行きましょう」

「ええ、お姉様！」

疑問が解消できた訳では無いが、今それを考えていても意味はない。どうやら、ステラが言うにはそろそろ帰る時間帯らしく、着替えるために更衣室へと向かう。

着替えた後、そのまま解散する流れとなり那澄と紗奈だけの帰り道となった。

「……ひよつとして、さっきまでの本当に頭突きの影響だったりする？」

「そんな訳ないに決まってるでしょ！あんなの演技よ。いやあ私も出来るようになったものね！お姉様だけでなく一輝さんたちにまで騙せるなんて！そうねえ、これからはもっと狙ってみようかしら！」

「絶対やめて」

「どうしてよ、満更でもなさそうだったじゃない？」

「もしそう見えたら眼科に行く事を勧めるわ。早めに行きなさいね」

「そういうお姉様も耳鼻科に行ったらどうかしら？あんなところで

驚くなんて挙動不審過ぎて、笑いを堪えるのに大変だったんだから。聞こえなかった振りしてくれれば、あんなに苦しい思いしなくて良かったのにい」

一体なぜ私が悪いという事になっているのだろうか。本はといえば那澄が朝から色々と全開だったからじゃないか。

「気になったんだけど、どうしてあんな悪戯をしたの？」

無いと思うが、ひよつとしたら何か理由があつてやったのかも知れない。だから、純粹な興味本位で聞いてみた。

「えっ、そんなの頭突きされたのが悔しかったからに決まってるじゃないの」

「ああ………そういう」

しかし、返ってきたのが聞いたこと自体が馬鹿らしく思えてしまうような回答に疲れた紗奈は、それ以上は聞かない事にした。

それにしても、不思議だったわね今日のプール。朝起きて、なんか頭に衝撃が走って、気づいた時にはお姉様が目と鼻の先にいたし。まあ、伝える程の事でもないし、伝えたところでマトモに受け止めてもらえなさそうだしね。それに別にどうしてもって訳じゃないけど、それでもあまり知られたくはないんだから、悪く思わないでよね。学園に来るまでのことなんて、聞いてても楽しくないでしょうし。